



37
454



始



37
454

三宅雪嶺
人 生 訓
備 利 夫 編



生

訓

大正
4. 8. 24
内交

序

けさほどは失禮いたし候おほせ置の御
事あるじへ物がたり候處思召のまゝに
てよろしくよきに御取計ひ相成候様申
出候まゝ右御返事のみ申上候かしこ

七月十一日

三宅龍子

衛藤利夫様御まへに

序

序言

古來豫言者或は大思想家の思想の世に行はるゝ、多くは簡
單なる言語に於てす。モーゼは僅かに十戒を垂れしのみ、
論語も悉く斷編零秩なり、詩三百一言以て之を蔽うて思無
邪とすべし。彼に心あり、我に心あり、相觸れて、一味の
靈感相通す。この際言語は偶々兩者の心を繋ぐ機縁と成れ
るもの、必ずしも説いて剩す所なきを要せず、語の長きは
却つて彼我默會する處の深きを害なふの虞れあり。言語は
彼我の距離を繋ぐ媒介物、其の短ければ短き丈、距離の

近きが如きの観なしとせず。モーゼも實際に於ては、必ずや多く説ける所ありしなるべく、孔子の口頭語は、必ずしも論語に盡きたるに非るや論なし。而かも十戒や論語が、後代を徳化することの深きは、種々の事情もあるべけれど、語の短かくして、意の長きこと、其の一に在らずんばあらず。

三宅雪嶺博士は、現代に於ける唯一の大思想家、或は豫言者の風格あるの士なり。その人格と思想と相即して渾然として一を成し、終始一貫、一絲紊れず、所謂之を仰いで愈

高く之を鑽れば愈、堅きもの、蓋し博士の如きは、絶えて無くして、僅かに有るの人と謂ふべし。予、博士の人格を推重すること久しく、年來其の文を読み、佳境、妙所に至れば、即ち手に従つて之を抄録し、之を以て自ら鞭撻するの資とせり。素より之を世に公けにするの意なかりしが、一日書肆東亞堂の主人伊東氏に會して、談偶、此の事に及び、若し幸にして博士の許諾を得ば、之を出版せんことを約せり。然れども、予が従來聚録したる所は總て予一己の爲にしたるものなれば、多少偏せる所あり、且書寫の脱誤なき

を保し難かりしを以て、更に業を新たにし、従來の博士の著書の中、『哲學涓滴』、『小泡十種』、『王陽明』、『偉人の跡』、『明治思想小史』、『宇宙』、及び『日本及日本人』數百號に亙りて廣く涉獵し、取りて以て、箴言とすべきもの、警句とすべきもの、絶妙の個所、三唱禁じ能はざるが如きパツセージを聚めて此の一卷を得たり。言々句々これ皆編者が竊かに醍醐の一味となせるもの、若し一人の心は千萬の心といふの眞なるべくんば、本書を公けにするも亦徒爾ならざるべきか。

猶は本書を公けにするの許諾を得たることに對し、編者は雪嶺博士に滿腔の感謝を禁じ能はざるものなり。

大正四年七月

編者 識

凡例

一本書は三宅雪嶺博士が従來、著述に雜誌に發表せられたる無数の文章中より、その最も感銘の深いパッセージや、警句、規箴とも見るべきものを蒐輯したものである。孰れも長文中より前後の連絡を切斷して、最も光つて居る一點だけを拾つたものであるから、剪裁その宜しきを得たるや否やの責任は一に編者に在る。これが爲に原著者たる博士を累することなきを希ふ。

一題して『人生訓』と云ふ。博士の文章は、その時事論、

凡例

批評、痛撃の類に至るまで、すべて是等を一貫して、那邊に向つてか人を訓へ導く所がある。零言隻語、擧げ來れば一として人生に對するの教訓ならざるはないからである。

編輯の順序は、まづ其の教訓を三段に見て、直接に個人に關するもの、次で國家社會に關するもの、次で古今の人物を論じてその趣旨を敷衍せるものとなし、近きより遠きに及ぶといふ趣にした。

一編者はこの仕事に著手する前に豫め原著者たる博士の許

諾を得、原稿が出来上つてから更にこれを携へて、念を推した。巻頭に載せた令夫人花圃女史の手紙は、本書の公刊に對する内諾の意を編者に傳へられたものである。今出版者側の希望により、女史の許しを得て、この手紙を以て序文の代りとしたのである。

三宅 雪嶺 人生訓 目次

人と力行

- 自ら悔るもの……………一
- 衰ふるもの、盛ゆるもの……………一
- 能力と發憤……………二
- 獅皮よりも驢鳴……………二
- 乾坤一擲……………二
- 人に憂ふ可きもの……………三
- 思想ありて言はざるもの……………三
- 二つの力行……………四

— 目次 —

- 一種の苦痛……………四
- 職業無きもの……………四
- 蠟燭の光……………五
- 力行……………五
- 好悪……………五
- 小成者流……………六
- 怠惰の癖……………六
- 順逆風と無風……………六
- 誇大妄想亦可なり……………七
- 發達の勢ひ……………七

—

○成す可きことの多きに苦し
まん……………八

○思ふには燈を假らず……………九

○熟慮の立消え……………一〇

○目的と手段……………一〇

○冥想せんより觀察せよ……………一一

○輕きもの、重きもの……………一一

○成功術と儒教……………一二

○努力と良心……………一三

○勤勞の爲の勤勞……………一四

○高所の石、低所の石……………一五

○服従せしめんよりは獨斷專

行せしめよ……………一八

○試験の快……………一九

○試験よりも學力……………二一

○休暇の意義……………二二

○大學卒業生の霸氣銷沈……………二三

○年齢と事業……………二六

○其の七十五日……………二七

○進むべきを進まざりしもの……………二七

○宜しく正行正施せよ……………三一

○山麓と絶頂……………三三

○奈破崙の快事とせし所……………三五

○國外に敵を求む……………三六

○二様の個人衛生……………三七

○慢心すべからず、絶望すべ
からず……………三八

○喜ぶ所無きもの……………三八

○歲月人を待たず……………三九

○現在よりも將來……………四一

○燭を照して進め……………四二

○事業と人……………四四

○生命の幅……………四六

○發達の二要素……………四六

○變化と進歩……………四七

○二様の固定せる生活……………四八

○書籍、新聞、雜誌……………五〇

○報復と勝利……………五一

○差違の生ずる所……………五二

○屈すること久しくして伸ぶ
ること大……………五三

○人間の廢物利用……………五四

○獨逸の必勝論……………五五

○志と抵抗……………五六

○佛人の夢想……………五七

○腹藝の有無……………五七

○運か不運か……………五八

○人生の職分にして快事……………五八

○資金と人……………五九
 ○希望を囑せらるゝと囑せられざると……………五九
 ○歸去來辭の眞價……………六〇
 ○十年の後より顧みたる現在……………六〇
 ○意氣地なき境遇……………六一
 ○無意義なる羨望……………六二
 ○二つの道……………六三
 ○穩當なる復讐……………六五
 ○氣力ある者の快とする所……………六七
 ○各人の力を致すべき所……………六八
 ○人間の偶然的假裝……………六九

○敵として欲しきもの……………七一
 ○神にも敵あり……………七一
 ○推移と抵抗……………七二
 ○金よりも事業……………七三
 ○文明の幸不幸……………七四
 ○英雄の事功と文明の事功……………七五
 ○才人の不幸……………七七
 ○利害の打算と急變……………七八
 ○業に専らなるもの……………八一
 ○地と人……………八二
 ○讀書は受動的……………八二
 ○讀書よりも魂……………八三

○疑惑より進歩……………八三
 ○一層安全なる修養……………八四
 ○他の不徳を責むるもの……………八五
 ○春風の心と秋水の腦……………八六
 ○自己の職業をして愈ゝ高からしめよ……………八七
 ○事業、職業、營業……………八八
 ○人皆爲すことあらんとす……………八九
 ○實力なきもの、あるもの……………九一
 ○天爵と人爵……………九一
 ○一種の忘暑……………九四
 ○君子に勇なきを奈何せん……………九四

○事や必ず成る……………九五
 ○肉欲の快……………九六
 ○大志あるものの想望する所……………九六
 ○安んじて困難に當れよ……………九七
 ○増進は健全なる行爲なり……………九八
 ○力行不惑……………一〇一
 ○久しくして徴あるもの……………一〇二
 ○肉と骨……………一〇三
 ○自ら知らざる所……………一〇四
 ○正義は擁護者を待つ……………一〇四
 ○修身訓と處世訓……………一〇五
 ○模範的立徳の價値……………一〇六

- 佛陀基督を作れるもの……………一〇七
- 快事としての立德……………一〇七
- 理想的紳士……………一〇九

國家と社會

- 懷疑と希望……………一一一
- 外來思想と國民思想……………一一一
- 團體の爲にする犠牲……………一一一
- 最も國家に憂ふべきもの……………一一三
- 議員の不言實行は不可なり……………一二四
- 政黨領袖と演說遣ひ……………一二五
- 能言實行……………一二六

- 政務官の任……………一二六
- 言ひ得て言はざるもの……………一二七
- 黨首と得要領……………一二八
- 輿論と爲政治家……………一二九
- 非を改めざるもの……………一三〇
- 須臾の繁昌……………一二一
- 偽 忠……………一二二
- 國政に冷淡なる現代青年……………一二三
- 阿官と阿民……………一二四
- 顯官先づ粉骨齋身せよ……………一二五
- 國家の爲か、勢利の爲か……………一二六
- 薩の内閣と長の内閣……………一二七

○ 忠君愛國の名に於て利益を

- 得たるもの、得ざるもの……………一二九
- 休暇の效力……………一三一
- 武臣の愛國心を疑ふ……………一三二
- 日本に於ける憲政の實……………一三四
- 政黨に陣笠たるの責……………一三五
- 政治と國民の公共心……………一三六
- 政治に冷淡なる藝術家……………一三七
- 弊害の卸賣と小賣……………一三八
- 在朝以外に忠君愛國者なき
乎……………一三八
- 上位者と國家の急……………一四〇

○ 天麩羅文明……………一四一

- 黨員名簿よりも同情……………一四二
- 境遇と職分……………一四三
- 國威發揚對憲政整備……………一四四
- 斯の如く政黨を見よ……………一四五
- 軍備と國際……………一四六
- 『吾輩政治家』……………一四七
- 若朽官吏に對する刺戟……………一四八
- 思想の頹唐を匡濟する便法……………一五一
- 大臣の言行と惡影響……………一五二
- 美名の下に利を計るもの……………一五四
- 官吏の職分に専らならざる

もの……………一五七

○危険思想と孰れぞ……………一六〇

○獨逸と隈閣……………一六〇

○變説改論よりも瘦我慢……………一六一

○裏切りと私利……………一六二

○飼殺しの教育家と其子弟……………一六三

○忠君愛國屋……………一六四

○眞に恐縮するもの……………一六五

○政治家の勇進勇退……………一六六

○曲學……………一六七

○老政治家と少壯政治家……………一六八

○選舉費廉不廉……………一六八

○太平樂者流の科學觀……………一七四

○社會の進歩と道德の進歩……………一七五

○三照應……………一七七

○境遇の誤解……………一七九

○好敵を得るは難し……………一八〇

○地の利か不利か……………一八〇

○併合せらるゝ國と、併合する國……………一八二

○模倣の弊は自ら模倣者とせざるにあり……………一八四

○平和主義と強國主義……………一八五

○老境に入れる國家……………一八七

○資本家と技術家……………一八八

○外務に人材無き理由……………一八九

○詰込教育の害……………一九〇

○外交と民心の彈力……………一九一

○示威運動……………一九二

○絶望より理想へ……………一九三

○實を結ばざるを如何せん……………一九五

○生前の利達と身後の名……………一九五

○早老的民族……………一九八

○文明の代價……………一九九

○世界の最大牛後國……………二〇〇

○地の利害と國力……………二〇一

○中年者の社會と老少年者……………二〇三

○民約論と免疫……………二〇四

○印度人の冥想と溫帶地方……………二〇五

○娛樂にも敵視す……………二〇六

○復讐の動機……………二〇七

○日本の佛教に對する基督教の勢力……………二〇八

○境遇と天才……………二一〇

○後世に傳はる人……………二一三

○人生き語死す……………二一三

○世の褒貶……………二一五

○帝力于我何有哉……………二一五

○ 懷郷の情と愛國心……………二二六

○ 蟲の善き主義主張……………二二八

○ 國難に際せる支那人と墨國人……………二二九

○ 悲劇よりも喜劇……………二二〇

○ 支那人の諦らめ……………二二二

○ 美醜と幸不幸……………二二三

○ 平和論と戦争……………二二五

○ 四海兄弟主義と戰國の外交……………二二七

○ 國際間の嫉妬……………二三八

○ 戰亂の利害……………二三〇

○ 文明と戦争……………二三二

○ 後人の發憤する所……………二二三

○ 人の超俗欲……………二二三

○ 西洋の美食……………二三七

○ 大陸に避暑旅行せよ……………二三九

○ 趣味にのみ専らなるもの……………二四〇

○ 古酒……………二四一

○ 概括的判斷……………二四二

○ 科學は名刀に似たり……………二四三

○ 演劇と人事の大劇……………二四四

○ 自ら知らざる者……………二四六

○ 人と名……………二四七

○ 名譽は猶紙幣の如し……………二四八

○ 外交官としての星亨……………二五〇

○ 紳士に上下あり……………二五一

○ 日本の紳士と英國のゼントルメン……………二五三

○ 大政治家の快事……………二五六

○ 外交官たるの資格……………二五六

○ 才能と依頼心……………二五七

○ 國の貴き所以……………二五九

○ 世に報いらるゝも可、報いられざるも不可なし……………二六〇

○ 年齢と位置……………二六二

○ 二種の純潔分子……………二六三

○ 新進の米國……………二六五

○ 宇宙の目的に關する樂觀……………二六五

○ 亂世必ずしも害ならず……………二六七

○ 有りさうなる無理……………二六八

○ 和漢の杜鵑……………二六九

○ 音樂家の壽命……………二六九

○ 音樂者と其の境遇……………二七〇

○ 三道と世變……………二七一

○ 斯の愚……………二七二

○ 乾坤人なきの感……………二七三

○ 洒脫なる埋葬……………二七四

○ 著者の力量と讀者の力量……………二七五

- 誤譯の通言……………二七七
- 糞土能く穀類を生ず……………二七八
- 武藏野……………二七九
- 藩政時代の治水……………二八〇
- 學者と俸祿……………二八一
- 書の傳不傳……………二八二
- 個人的花と社會的花……………二八五

時代と人物

- 人物と遠近……………二八七
- 偉人の追憶……………二八七
- 蟹と人……………二八八

- 時代の前後と其の價值……………二八八
- 過去の人物……………二九〇
- 學問活用の時代……………二九〇
- 時代人心と治亂……………二九四
- 英雄の事業と民力……………二九五
- 妓夫猶ほこれをよくせん……………二九六
- 忠居愛國と爵位利祿……………二九七
- 舊幕、明治、大正に於ける
官學私學……………二九九
- 今日之最善と將來……………三〇〇
- 我が外務省と悍馬……………三〇三
- 葬らんより利用せよ……………三〇三

選舉競争の人格に及ぼす影

- 響……………三〇五
- 空中旅行と思想……………三〇六
- 創業と守成……………三〇七
- 男女の差別と時代の盛衰……………三一二
- 眼に見えぬ力……………三二三
- 道の古今……………三二四
- 現代式を悦ぶも將來を奈何
せん……………三二六
- 時代と天才……………三二七
- 時代と努力……………三二八
- 現代と歡樂……………三二九

- 征韓論と民選議院論……………三三〇
- 開港と攘夷……………三三〇
- 對外政策としての攘夷……………三三一
- 夷狄と國際法……………三三二
- 狼狽よりも鋭敏……………三三三
- 勇氣を要する時代……………三三四
- 人としての藝術家……………三三五
- 器の大なるもの……………三三六
- 得要領、不得要領……………三三八
- 田園と偉人……………三三〇
- 涙脆きもの……………三三二
- 薩摩武士の習慣……………三三二

○一部眞面目、一部滑稽……………三三三
 ○乃木式標準……………三三四
 ○何處にも小袁世凱あり……………三三六
 ○口實……………三三九
 ○財力ある政治家……………三四〇
 ○才に用ゐらるゝもの……………三四二
 ○謙信と信長……………三四三
 ○スコットとバイロン……………三四五
 ○歴山王と上杉謙信……………三四七
 ○西行と直實と實朝の轉業……………三四八
 ○近視者流……………三五〇
 ○神韻縹渺……………三五三

○勇退の巧拙……………三五四
 ○敵とする所……………三五四
 ○人の己れを知らざるを憤るもの……………三五五
 ○教育と人材……………三五六
 ○時代と人物……………三五七
 ○今日主義者……………三五八
 ○明治大帝と維廉一世……………三六〇
 ○偉人尊重の根本義……………三六三
 ○嶋を負ふの虎……………三六四
 ○此の機微……………三六四
 ○大江廣元と勝海舟……………三六五

○朱氏とブラトーン……………三六八
 ○楠公の處世法……………三七〇
 ○學者以上の學者……………三七一
 ○人物判定の標準……………三七四
 ○世に知られざるも亦可……………三七五
 ○現在の事……………三七五
 ○世に感謝せらるゝ人……………三七六
 ○人物と容貌……………三七七
 ○時勢と事功……………三七八
 ○大哲カントの一生……………三八一
 ○音楽家シヨパンの死……………三八四
 ○天才北尾と其の境遇……………三八六

○樂聖モツァルトの一生……………三八八
 ○東西一對の史家……………三八八
 ○始皇と該撒……………三九一
 ○誠實無私の力……………三九四
 ○唐虞三代の人物……………三九五
 ○意外なる容貌……………三九六
 ○吉田松陰と其の模型の人物……………三九七
 ○伊藤仁齋の心事……………四〇〇
 ○南洲の憂へとする所……………四〇二
 ○伸ぶべくして伸びざりし人……………四〇四
 ○名と人……………四〇六
 ○生死と毀譽……………四〇七

○東湖(藤田)象山(佐久間)及び方谷(山田)に於ける福運の分配……………四〇八

○范増の出所進退……………四一〇

○松陰が生前の境遇と死後の境遇……………四一一

○岩倉公の長所弱點……………四一二

○時代を超越せる人物……………四一三

○彼の五人……………四一四

○行路難を知らざる人物……………四一六

○マジニの不平……………四一七

○井伊直弼の不用意……………四一八

○陸羯南の人格と文章……………四二一

○虎の如き人……………四三二

目次終

三宅 雪嶺 人生訓
人と力行

自ら悔るもの
衰ふるもの、盛ゆるもの

○自ら悔るもの
人は先づ自ら悔りて他に悔らる、自ら悔らずして人に悔らるゝあるも、自ら悔るに至りては唯だ朽敗を早くするのみ。

—〔日本及日本人〕—

○衰ふるもの、盛ゆるもの

満足する者は衰へ、落膽する者も衰ふ、唯だ早く長處短處を知り、

人と力行

能く短處を補ふ者、隆盛の域に進むに堪ふ。——『日本及日本人』

能力と發憤

○能力と發憤

人の能力に限りあるも、奮發すると否とにて、行動に少からざる差違を生ず。火事に際して擔ひし所、鎮火後に擔ふ能はざるが如き、全く神經興奮の如何に因る。——『日本及日本人』

獅皮よりも驢鳴

○獅皮よりも驢鳴

口を開けば愚を知らるれど、愚なる者が愚を掩へると能く何をかせん、獅皮を被りて沈黙し、以て衆を欺くは、驢鳴して相應の荷を負ふと孰れぞ。——『宇宙』

乾坤一擲

○乾坤一擲

ルビコンを渡り、惡漢と罵られ、狂人と嘲らるるも、ケーザルはルビコンを渡りて勝を得、而してケーザルたるを得たり。

——『日本及日本人』

人に憂ふ可きもの

○人に憂ふ可きもの

人に憂ふべきは多言に在らず、空論に在らず、徒らに思慮するに在り、單に思案に暮るるに在り。——『日本及日本人』

思想ありて言はざるもの

○思想ありて言はざるもの

腦中に幾多の思想の涌き出で、人の言ふ所を聽いて平凡に感じつと、敢て自ら進んで言はざるは、必ずしも謙遜よりせず、思想が或る邊まで纏まりながら、之を發表するに努力を要し、其の努力を厭ふに出

人と力行

づ。——『日本及日本人』

二つの力行

○二つの力行
黙するべくして黙するの力行なると同じく、言ふべくして言ふは、言ふべくして言はざるに比し、確かに力行なりと謂ふべし。

——『日本及日本人』

一種の苦痛

○一種の苦痛
人は懶惰に傾き、成るべく勤勞を避くるも、全く勤勞すべき事なきは一種の苦痛なり。——『日本及日本人』

職業無きもの

○職業無きもの
職業は人として缺くを得ず、事業の爲に必要ならずんば、己れの精

蠟燭の光

神の健康、或る點に於て身體の健康を維持するに必要なり。職業なき者は、己れ自らを傷ひ、併せて世に害を與ふ。——『日本及日本人』

○蠟燭の光

蠟燭は自ら消滅して光明を發す、自ら消滅するを知らざるものは光明を發するを得ず。——『日本及日本人』

力行

○力行

自らは認し、自ら必要と信ずる所は、自ら満足するまで努力する、之を力行と稱す。——『日本及日本人』

好悪

○好悪

好んで短を知り、悪んで長を知る。——『日本及日本人』

人と力行

小成者流

人と力行

○小成者流

英雄時代去りて平凡時代來るとは、小成者流の口にすべきこと、血氣の壯なる青年が初めより平凡を以て居りては、九十里の半を往かんとして遂に十里にも足らざるに均し。——『日本及日本人』

怠惰の癖

○怠惰の癖

人に在りて怠惰の癖は最も害あり、常に精神を遲鈍にせず、身體を弱くし、往々病床に呻吟せしむ、小人閑居して不善を爲すといふも事實なり。——『日本及日本人』

順逆風と無風

○順逆風と無風

事業は力の發現にして、力の發現は概ね人に益す。正義の力あり、

誇大妄想亦可なり

○誇大妄想亦可なり

邪惡の力あれど、帆船々長の最も苦むは無風にして、順風を喜ぶは勿論、逆風とて利用するに道あり。逆風を利用し得ざるは技倆に乏しきなり。——『日本及日本人』

發達の勢

○發達の勢

少壯者は元氣に任かせて危険を冒し難苦を耐へ忍ぶべし、能力なくして誇大妄想狂に類するあるも、其の甚だしからざるは其の儘に何事をか成すを得べく、唯だ甚しきを檢束し、若くは瘋癲病院に入るべし。——『日本及日本人』

人と力行

ざる血氣を以て發し、制すべからざる氣力を以て進まざれば、目覺ましく活動するを得ず。——『日本及日本人』

○成す可きことの多きに苦しまん

生活の爲に職業を求むると言へば言ひ得んも、軍人が俸給勳章等を念とするよりも、専ら君國を念とし、又何程か君國を念とするの、遙かに多く能力を發揮し得るが如く、生活の爲にするよりも國家の爲め、社會の爲め、人類の爲めにする方、多く能力を發揮し得べし、もののふの矢橋の渡し近くとも急がば廻はれ瀬田の長橋、職業を求むるに汲汲たるは急いで損する者にして、自己よりも大なる者の爲にせば、成すべき事多く、其孰れを擇ぶべきかに惑はん。——『日本及日本人』

成す可き
ことの多
きに苦し
まん

思ふには
燈を假ら
ず

○思ふには燈を假らず

學而不思則罔、思而不學則殆、讀書するは即ち學ぶ者なるも或は思はざるの嫌なからず。學ばざるの殆けれど、思ふの必要をも認むべく、思ふには燈を假らず月星を假るの一層有效ならずや。ピスマルクは夜中單身犬を携へて郊外に出でしが、雄謀大略は實に此間に成りにき。グラッドストーンは夜半議院より徒歩にて歸り、若し雨天なれば馬車にて歸宅し、更に雨具を整へて闇夜に歩行せり。此類の事は舉げて計へ難し。紅燈綠酒に夜を深かすも多けれど、一世に爲すこと有るの士は、月星の光に親むの珍しからず、闇夜も必しも妨げず。——『日本及日本人』

熟慮の立消え

○熟慮の立消え
何人も幾許か思慮し、或は思慮し得る丈け思慮するも、成案を力行するを厭ひ、沈思熟慮して立消に終らしむ。——〔日本及日本人〕

○目的と手段

板垣氏曾て陸奥氏を評して曰く、人は何程彼を誹るも、予は彼に與みせんと欲す、彼の目的は甚だ好し、唯だ目的を達する爲に、如何なる手段をも忌み憚らず用ることあり、是れ其の彼を誹らざる者に嫉視せらるゝ所以なるべしと、二君たるものマキアヴェリに私淑するあるか、マの人生に期せしは、蓋し細工は流々仕上を覽よといふの類なりし。仕上は覽たし、目的は達したし、而も目的を達するに如何なる

目的と手段

手段をも用のべく、倒行逆施毫も厭ふ所にあらずと謂ふは、其の目的の終局なる時なり、若し其の目的にして他の大目的の手段たるに於ては、手段の爲に是非曲直を構はざる次第と爲る、恰も鼠を惡むは其の器物を毀損するに由るに、只管之を殺さんとしてステッキにて障子、唐紙、時計、花瓶を擲き壞るが如きなり。——〔小泡十種〕

○冥想せんより観察せよ

眼を閉ぢて考ふるは宇宙を小にするもの、唯だ宜しく眼を開くべし、観察し得らるゝ限りを観察すべし、宇宙に對して考ふる勿れ、試みよといふは、之を観察せよといふ事なり。——〔宇宙〕

○軽きもの、重きもの

人と力行

冥想せんより観察せよ

軽きもの、重きもの

輕薄なるものは愉快に感ぜらる、帽子は軽くして薄きを快とし、衣服も軽くして薄きを快とし、寢巻も軽くして薄きを快とし、荷物は猶ほ更ら軽くして薄きを快とす、凡そ膚に接觸する、輕薄なるより快なるあらんや。然れども霜氣森々、風稜威々たる夜、着る所は重きを厭はず、纏ふ所は厚きを厭はず、彌やが上に彌やに衣類を着重ねんと欲するなり。荷物も價あるを欲せば、決して重きを厭ふべからず。

——『小泡十種』

成功術と儒教

○成功術と儒教

處世訓を以て修身訓に背馳すとするは誤解に出づ、如何なる處世訓か修身訓に背馳したるある。米國に多く處世訓の書あり、如何に成功

すべきやを説き、形に於て修身訓と異なるも、究極特に背馳する所なし。サミュエル・バゼットが成功の秘訣として、タクト(術)、プッシュ(突進)及びプリンシプルを擧げしとして、此三事を處世訓の主題とする者あるが、一見修身訓と關係なけれど、智仁勇の達徳と暗合し、即ちタクトは智、プリンシプルは仁、而してプッシュは勇に當たれり。達徳の智情意に配當すべきは既に屢言はれたるが、バゼットは此種の知識に富まず、己れの經驗より判断せしなるも、其の成功の秘訣とせる所は儒教の旨を得たり。——『日本及日本人』

○努力と良心

力行せば事は成り力行せざれば事は成らざれど、事に良否ある力行

人と力行

努力と良心

して事の成るの必ずしも稱すべからずとせんも、心に疚しきは何處までも力行するに堪へず、精神に異状あるは格別、普通なる限り、日夜黽勉して倦まざるは、其の事や必ず善良なり、中途に廢するは、心中に惑へるが爲めに於て、強慾非道、人を苦めて到らざる無き者、將に死せんとして念佛を唱ふるは、非道を以て一貫するに堪へざるなり。力行して惑はざるは、良心なくして能くすべからず、良心よりせば、爲す所に過失あるも、大體に於て人に益すべく、益する無きも、自らの良心を鋭敏にするの効果あり、故に力行して惑はざるは仁に近し。

勤勞の爲の勤勞

○勤勞の爲の勤勞

—『日本及日本人』—

高所の石
低所の石

富貴にして寝ながら山海の珍を味ふも、常に斯くして經過するを得ず、必ず何事をか爲さんとし、若し爲すべき無ければ無聊に苦み、懊惱を禁ぜず。君主宰相の功名心に富むは、太平無事に安んぜず、強て口實を求めて戦端を開くに及ぶ。小人の閑居して不善を爲すも空しく閑臥するを得ざるなり。動物園の獸畜が飲食に不自由ならずして常に檻内に跳躍するが如く、人は勤勞の爲めに勤勞すと謂ふを得べし。

—『日本及日本人』—

○高所の石、低所の石

石を千仞の山に引き揚げて、而して墜落し下す、則ち勢甚だ猛烈、これ重力を凌ぎて蓄積せる潜勢力の一時に現發し出づるなり、人の艱人と力行

險に耐へて遂に能く偉功を成すも理亦た然り。但だ石の初より千仞の
 山の上に在るあり、之を衝き墜すに、勢の疾きこと毫も刻苦して引き
 揚げたるものに異ならず、夫の門閥を負ひて衆人に推重せらるゝは、
 此に同じきこと莫からんや、高處の石は高處の石なり、引き揚げたる
 と否とを問はず、墜落するの勢は全然同一にして、絶壁に立ちて尋常
 の石を投げ落せば、殆ど砲丸を打ちおろすが如き觀あり、乃ち事を成
 すに當て、門閥なりとて決して忌むべからざるに非ずや、富貴若しくは
 權勢に縁ある者は、經歷の親るべき無きも、自然に下僚を威服し能ふ
 に非ずや、門閥は實に潛勢力を蓄ふるものなり。されど初より高處に
 在りし所の石を其儘にまろび落す者は、まろび落すことは爲し得ると

も、平地に降りて尙能く力を揮ひ能ふやは保すべきに非ず、卑きより
 して石を引き揚げし者は、何に致せ、石を引き揚ぐる丈の能は確かに
 之れあり、たとへ高處に登らずとも、何かな爲し得べく、又何かな爲
 すべきなり。門閥は力ありといふも、之を消費するに止まり、之を増
 益するに長ぜず、造作なく顯官に列せる者が、顯官として相應に任に
 堪へ、衆の仰で畏るる所にてありながら、職を辭して我れは顔に人に
 接するに及で、大に愚を露はすことあるは、他の緣故に因て得たる潛
 勢力のいつまでも持續し得ざるが爲めのみ。政府の反對者が大言を吐
 き、大平樂を謠ひつつ、どうにか暮らして行くのも、役人に這ひつく
 ばつて小安を娛まざりし瘖我慢といふ潛勢力の報酬にして、在官者に

服從せしめ
は獨斷專
行せしめ

人と力行

は一寸不思議に思はるべし。——『小池十種』

○服從せしめんよりは獨斷專行せしめよ

昔より將外に在りて王命を奉ぜずとの諺あるは、單に王が遠征の實狀を知らざるを意味せず、全責任を負へる行動の最も効果多きをも意味す、往昔急使の一晝夜五十里なると、今日電信の一瞬間萬里なると、著しき違ひなれど、其故に在外の將の獨斷專行を非とする能はず、獨逸との役、佛將マクマオンの殘念がらるよは、中央政府の訓電を得て行動を變ぜしことなり、其の命令に従順なりしは、戰機を失ふに與れり。軍隊は充分に統一を保持するの必要あるも、各部分に或る範圍を限りて獨斷專行を許さざるべからず、部將の有力なる程愈々獨

試験の快

○試験の快

斷專行の範圍を擴め、眞に任に堪ふると信ぜば、宜しく全權を委ね、思ふ儘に行動せしむべし。——『日本及日本人』

夫れ人は安居を好む、角枕右に在り、床榻左に在り、茶器、蕉扇、新聞紙前後に雜陳し、一呼すれば來りて用務を奉ずる者あり、是れ之を好むは人の常情なり、何ぞ赫々たる炎天の下、凜々たる寒威の中、流汗滿身、氣息凍結、好んで屋外に出づる者あらん、然るも一たび旅行の快樂を味ふれば、炎天何かあらん、寒威何かあらん、嘗に炎天寒威を恐れざるのみならず、故らに崎嶇崢嶸たる山路を好み、斷崖に臨みて欣々し、棧橋を渡りて嘻々たるものあらん、是に於てか身

人と力行

體愈と壯健となり、身體愈と壯健となりて、旅行の快樂を感ずること愈と多く、かくて愈と益々旅行に旅行を重ねんことを願ふの念起らん。精神の上に在りても亦た斯の如し、事を爲すに當り、其の初や齟齬し易く、蹉跎し易く、厭意生じ、倦心來るも、勵精奮淬、少しく歩武を進むるに至らば、困難障礙寧ろ面白味を加ふるなり。夫れ學校教育の目的たる、少數の偉人物を作るにあらずして、品性智力一箇人たるの面目を備へ、自ら立ち、自ら食ふの民人を作るに在れば、極めて高等なる學校の外は、試験の必要甚だ多し、試験は學修の衝路に當り、著るしき障礙を與ふべしと雖も、而も我が進路に横絶せる障礙をば蹴一蹴、破りて而して馳せ過ぐ、抑も亦た佳興にあらずや。試験は猶ほ旅

行の小嶮岨の如し、旅行の際、滿腔の勇氣を鼓し躑躅たる健脚を擧げ、猛然として彼の嶮岨を踏破し過ぐると等しく、一躍して試験を衝き破る、豈に快事にあらずとせんや。半生を過ぐれば、學業試験なし、其の試験のあるに際し、其の半生以後の爲めに力量を養成するの時に際し、我が進路を遮断するものをば、踏破し蹴破して進み行くは、男兒が所爲として當然の事なるのみ、試験に關して或は不平を鳴らし、或は痛慮するも、強ち無理なるにあらざるも、かゝる事は考慮の少しく盡さざるものあり。——『小泡十種』

○試験よりも學力

校則は守るべく、試験を受けよとあれば之を受くべきも、學校は學

試験より學力

力を養ふべき處、學力を養ひ得れば足る。試験に優等なれば種々の便利を得べけれど、さる便利は人に依りて事を成す者の喜ぶ所、雄偉個體の士に於て何か有る、實力の備はらんか、十年二十年優等生に及ばざるも、最後に高く飛翔して其上に超出せん、優等生は初め吉、後に凡、實力生は初め凡、後に吉、其の孰れかを擇べよ。孔明が三分を圖り、ピットが首相と爲りし年齢に於て、孜孜汲々試験の點數を争ふなど、顧みて恥かしからずや。試験は有爲の青年の心を動かすべき者ならず。——『日本及日本人』

休暇の意義

○休暇の意義

一月二月の休業は、學校に課業なきを意味し、爲すべき事なきを意

大學卒業生の覇氣銷沈

味せず、若し之を善用すれば、在學中に利すべく、或は在學中よりも更に卒業後に利すべし、課業に關係なき事は、課業に益せざるも、身に得る所多し。——『日本及日本人』

○大學卒業生の覇氣銷沈

客氣に驅られて大言壯語する者の言質を捉ふるは愚の極にして、彼も一時此も一時と爲すべきも、大學卒業生の多きに比例して、自らの志望を達せんとするの甚だ少きは、社會の進歩の上に遺憾ならずとせず、多數は一生を官廳に委ねて可、一生を既設會社に委ねて可、寧ろ安んじて職務に従事するを希ふべきも、嘗て眼一世を曠しくせし者が相ひ率ゐて其列に入り、僅かに官吏風を吹かし紳商風を吹かすを以て

満足するは、寧ろ不可思議の現象なり。或は英雄的行動を敢てせざるを以て時勢の不利なるに歸し、明治維新の際なれば、一躍風雲に乗じたるべきに、太平の世、空しく老いざる能はずと辯解するが、是れ或る程度以上に聴くべからず、薩長土肥出身の元老が二三十歳にして廟堂に列せしは、才能よりも時勢の與かること多く、以て現代に人なきを推斷すべからざるも、今日二三十歳にて内閣に入るを得ずんば、去りて他方面に於てすべし。現代の複雑なること維新當時と同日の談ならず、當時夢にも考へざりし事が現代の尋常事と爲りつゝあるは二三のみならず、維新の變に西郷木戸大久保等が顯はれ、憲政の準備及び實施に伊藤大隈板垣等が顯はれ、露國との戰役に東郷乃木小村等が顯

はれし如く、或る事變の起る毎に多少の人物の輩出するは順序の然るべき所、斯の如き事變は容易に起らずとも、彼に比して小なる事變は絶えず起りつゝあり。年一年、社會の狀態の異なると同様、新たに著手すべき事の出で、著手すれば其れ丈け自らの功名心を満たし、併せて社會の缺陷を補ふの益あり。新方面に於て西郷伊藤東郷の如くなるを得ざるも、多數官吏の一員として埋没し、多數銀行會社員の一人として埋没するに優ること萬々ならん。大なる事變なきが爲めに大なる手腕を揮ふを得ざるにせよ、中なる事變ありて中なる手腕を揮ひ得るに、故さら官廳に閉ぢ籠り、既設銀行會社に閉ぢ籠り、小なる手腕を揮ふは惜むべき限りなり。——（『日本及日本人』）

○年齢と事業

若し敢てするの勇あらば、六十にて晩きこと無く、七十にて晩きこと無く、八十も尙ほ必ずしも晩からず。思ひ立つと共に、實行に著手すべく、年齢の如何を考ふべからず。歎聲を發しながら實行に著手せず、徒らに事の後れたるを歎ずるは、愚之れより甚だしきは無し。されど六十にて事を始めしありとて、五十にて善い加減に過ぎし、七十にて事を始めしありとて、六十にて善い加減に過ぎすは、時間を浪費する者にして、斯る輩は何歳に達するも何の爲す所あるを得ず。大器晩成は前半生を怠惰にすべきを意味せず、多くは前半生の勤勉の結果なり。空々寂々として一生の大部分を過ぎし、俄かに日暮れ途遠きを

歎ずるも、何の益あるべきに非らず。——『日本及日本人』

○其の七十五日

人の噂も七十五日とは誰が言ひ出せるか、人の噂は大抵七十五日ぐらゐなり。人氣商賣する者は、成るべく其の七十五日の中に遂行せざるべからず、七ころび八起きを期する者は、其の七十五日を笑て通らざるべからず。——『小泡十種』

○進むべきを進まざりしもの

ウ井リアム・ピットがケムブリッジ大學に在りて常に首相たるべきを期し、二十二にて衆議院に入り、二十四にて藏相と爲り、二十五にて首相と爲れるは、其人と其時代と共に例外に置くも、幾許が此に似た

るは何の地にも指名すべし。二十五にて首相と爲り得ずんば、三十五にて如何、四十五にて如何、せめて五十五にて如何。大學在學中より就職難を口にし、文官試験に及第して高等官と爲るを無上の成功とせば、特に言ふべき無けれど、抱負に於てピットに譲らざる者、必ずしも少からざるに、其の卒業するや、凡々者流と同じく試験を受け、落第すれば翌年再び之を受け、或は四五回して尙ほ高等官の列に入らんことを願ふ。小ピットは小々ピットたるをも得ず。幸に一回にて及第し、頻りに昇進するも、三十五にて何の地位に達するや。四十五迄に局長と爲り、次官と爲るも、大臣の更迭と共に辭職を餘儀なくされ、巧みに保護色を利用して五六大臣の下に安んずるも、能く五十五歳ま

で位置を占むるを得るや、貴族院議員として餘命を終るは、將來の首相を以て自ら期したりしと雲泥の差違ならずや。而して是れ尙ほ上等の部にして、生死の如何の同窓の友に知られざる者は、時に當年の事を顧み、夢中の夢の如くならん。されど本來斯くまで無能の人物なるや、相當の境遇にて相當に才能を發揮するを得ば、其の經過し來れるに比して大に見るべきありたるに非ずや。或は局長と爲り次官と爲るが僥倖に出でしもあると、書記官を以て終れる者が、次官の位置を得て普通の次官よりも敏腕を揮ひ得たらんと思はれ、若し官吏と爲らず、別に適當の方面に活躍せば、更に一層事功の擧がりたらんと考へらるゝなり。今や當人自ら後悔し居るべく、知る者も氣の毒に感ずる

が、彼等が過去の誤れるを悟る時は即ち日暮れ途遠きを歎ずるの時なり。彼等は何が故に早きに於て最も己れの適する所に向つて進まざりしや。唯だ少しく決断の足らず、當面の安樂を求めて危険の恐れあるを避けしこと、最も與かれりと謂ふべし。青年の選手なる大學生より出で、而して無教育なる者に傾使せらるゝの珍らしからざるは、皆な唯だ断すべきに断ぜざりしが爲のみ。進むべきを進みて日の暮れたるに非ず、進むべきを進まずして日の暮れたる者、途の遠しとて唯だ自ら責むべく、他に責むべき無し。進むべきを進みたらんには、日暮れずして目的地に達し、少くも目的に近づくを得たるべし。

——『日本及日本人』

○宜しく正行正施せよ

日暮れ途遠きの歎は老年に餘儀なき所とせんが、老年に入りて事を始むる場合、果して斯く歎ぜざるべからざるか將た然らざるか、聊か思慮を要す。古來老年に大事を成し遂げしの多きを考ふれば、日暮れ途遠きの歎聲の無用なるを認むるに傾かん。グラッドストーンは二十四にて衆議院に入り、二十六にて大藏次官と爲り、二十五にて商務長官と爲り、殆どピットの壘を摩する程なりしが、保守黨より自由黨に轉じ、生涯に一轉換を生じ、將來の覺束なく考へられぬ。然るに六十にて自由党内閣を組織し、後七十七、七十八、及び八十四にて内閣を組織し、最後に引退せしは實に八十六歳に於てなり、事功の大に稱

すべき無く、或は自由黨衰退の原因を作りしと言はるゝも、八十六まで自由黨首領として活躍するに堪へたるを否定すべからず。大隈伯も三十餘歳にして臺閣に入り、爾後常に政界に重きを成し、明治三十一年、六十一歳にて首相と爲り、内閣の瓦解してより、政権の再び歸せずとし、尾崎氏の如き、早くも去りて伊藤公の傘下に馳せ參ぜしが、本年七十七歳にて内閣を組織し、前に脱走せし尾崎をも加へ、餘勇の壯者をも凌ぐに足るあり。伯が老齡を以て政界に活躍するの適當なるか、又は政治教育に力を致すの適當なるかは、意見の一致せざるも、七十七にて首相と爲り得るより考ふれば、六十にて日暮れ途遠きを歎ずるは早きに過ぐ。五六十にて政界に志ある者は、倒行逆施するの必

山麓と絶頂

要なく、宜しく正行正施すべし。樞密院の老人、貴衆兩院の老人、及び其他の老人、政界に意あらば若返りて活躍するに何の憚るべきかある。——〔日本及日本人〕

○山麓と絶頂

麓あれば絶頂あり、絶頂あれば麓あり、麓に居らんと欲せば居るべく、絶頂に登らんと欲せば登るべし、孰れを擇ぶべしと定まらず。實に麓は溫度中和にして身に適し、森林の鬱蒼たる、瀑布の懸れる、人の集まりて遊樂すること、ことの然るべき所なり。歡樂は麓に在り。安樂は麓に在り、日常の愉快は悉く麓に在り、されど老若男女皆齊しく感じ得る所、如何に衆と樂むの愉快なるにせよ、他人よりも身體

の強健にして女兒の樂む所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に饑を忍び寒に堪へ絶頂に止まりて千里一望の快を恣にせんとする。或はアルプス山を低しとし、全く人跡を絶てるヒマラヤ山に登らんと企つ。第一高峯エヴェレスト海拔二九〇〇〇尺、第二高峯ゴト井ンオーステン二八二七八、第三高峯カンチャジャンガ二八一五六、此等の上に何の愉快あるか、唯白皚々、零度以下百數十度のみ、而も若し幸に其の上に立つを得んか、萬古の冰雪萬里に互り、壯絶快絶壯絶々を叫ぶが如く覺えん。女兒も之を聞いて地球上の最高に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己れの企て及ばざるを歎ぜん。

—(日本及日本人)—

奈破崙の
快事とせし
所

○奈破崙の快事とせし所

奈破崙の幸福なるは十七歳迄なりといふ者あるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心中の安寧を得ざりしを指す。百計盡きし後、一妙案の出でたる時、欣喜雀躍したらんも、普通の歡樂を事とせるは日數に於て甚だ少く、普通の意義にて幸福とすべからず。されど奈破崙の愉快を感じるは、安樂よりも南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸ばし得る所に満足を感じ得たらん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て満足せしもの、其の羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。——(日本及日本人)

國外に敵を求む

人と力行

三

○國外に敵を求む

國際競争の盛んにして愈々益々盛ならんとする時代、個人としても、團體としても、國內に敵を求むるは、國外に敵を求むるに若かず。己れ自らの國內に於ける位置を考へ、他の強國に於ける同位置に何人の當るかを考へ、之に劣らざらんと努力すべし。汝の敵は誰と問はれ、國內に敵あれば之を敵とするの避くべからずとも、別に國外に競争の目的物を求むべし。競争の目的物の意義に於て、官吏は好敵手を國外に求め、政黨員は好敵手を國外に求め、宗家も、教育家も、商も、工も、國外に好敵手を求むべし。今人と競ふを欲せずんば、古人に對するも面白し、唯だ國家の敵は過去に對手を求むに餘りに狀勢の逼迫

二様の個人衛生

人と力行

三七

○二様の個人衛生

個人衛生は社會の事情にて差違を生じ、大略二様に別つ。土著にして平穩なるは、生命の延長を念とし、體力の増進を重んぜず。狩獵若くは航海を業とするは、體力の増進に重きを置き、生命の延長も之が必然の結果なりと考ふるに傾く、支那は早く鼓腹擊壤の民と爲りし丈、生命の延長を以て衛生の目的を達せりとし、歐洲は努力を餘儀なくされ、體力の増進を以て衛生の目的を達せりとする。支那も強力を

欲し、歐洲も長壽を欲すれど、個人衛生に就て此邊に區別あるを認むべし。——〔日本及日本人〕

○慢心すべからず、絶望すべからず

強點あるも慢心すべからず、弱點あるも絶望すべからず。強點に慢心せず、弱點に絶望せざる者は愈々興隆し、之に反するは、衰頹し、滅亡す。——〔日本及日本人〕

○喜ぶ所無きもの

食なきは食を得て喜び、衣なきは衣を得て喜び、住なきは住を得て喜び、悪食悪衣悪住なるは、美食美衣美住を得て喜ぶも、美食美衣美住なるは何を以て喜ぶや、一層美なる食衣住を得て喜ぶも、其の喜ぶ

慢心すべからず、絶望すべからず

喜ぶ所無きもの

の程度は、食衣住なきもの之を得るに比して頗る低し。其日暮らしの労働者が百圓を得れば、手の舞ひ足の踏みを知らざるべきが、三井三菱の主人が斯く迄に喜ぶは何の場合に於てなるか。新たに百萬圓を得れば、不快を感じざるべく、而も特別に愉快を感じ。労働者の萬倍を得て尙ほ其の幾分一の愉快を感じざるなり。世間の大なる愉快とする所に慣れ、普通の愉快を愉快とし感じ得ざるなり。

——〔日本及日本人〕

歲月人を待たず

○歲月人を待たず

現に位置を占むる者は、日暮れ道遠し、暮れざるも既に中し、洋々として春海を望むが如くならず。學校に籍を置き、全く位置なく、又

は位置の定まらざる者は、如何なる事をも考ふべく、如何なる事をも企つべし。少しも急ぐの必要なく、念に念を入れ、大成を期して可なるが、歲月人を待たず、青年期は幾年間の事ぞ、早く用意せずんば、顧みて悔ゆるに至らずや、毫釐の差、千里を致すとは、青年にも戒むべき所、同窓の友として君と呼び、僕と應ずる者、十年後二十年後、三十年後、如何の變遷を見る、或は曩に後進視せし者の靴の紐を解くを餘儀なくせられずや。而して其の差異の生ずるは他にあらず、己れに適當なる順序に於て適當なる道を進みたるや否やに在り。人に能不能あり、能者に不能あり、不能者に能あり、低能兒と生まれざる限り、各々己れの能を發揮すれば、何人の前に出づるも恐るべき無し。而も

之を發揮するには、徒らに時日を費すの惡癖を作るべからず。

—「日本及日本人」—

現在より
も將來

○現在よりも將來

事業を成し遂ぐる者の多きも、後次第に發達し、棺を蓋ひ、生涯の大なる輪廓を成すは甚だ少し。事業に成功し、生涯として失敗せるあり、事業に失敗し、生涯として成功せるあり、生きて特に稱すべきを覺えず、死して愈々影の長大を加ふるあり。人は一時の事を輕んずべきに非ずして、一時の事の集まりて生涯を形成するとすべきも、一時の事は短く、生涯の事は長し、生は短く、藝は長し、短き者あり、長き者あるを知るを要す。何事も多少事業たるの性質を帶ぶるも、眞に

事業らしき事業は生涯を費して尙ほ足らざるが如くならざるべからず。事業に較ぶれば、就職の如何は瑣末の事、試験の如何は更に瑣末の事、誠に言ふに足らず。而も獅子は兎を搏つに全力を以てし、象を搏つに全力を以てすと傳ふ、其時に在りて其事に當るや、全力を以てせざるべからず。學校に籍を置いて試験席に臨むには充分に意を致して然るべし。とはいへ春秋に富む者は過去よりも將來の長し、宜しく將來を考ふべし、時として將來に没頭し、現在を忘るゝも妨げなし。

—『日本及日本人』

燭を照して進め

○燭を照して進め

普通に日暮れ途遠きを歎ずるは、中年まで雜事に取紛れ、斯くて瓦

礫と共に朽ち果つるを憂ふるを指すが、初めより志望の大にして何等か快心の事業を念とせば、早くより準備し、中年後の後悔なきを期すべし。已むなく卑職に従事するも、是れ已むなきの事、志望の挫けざる限り、必ず之を達するの時機を見出だし得べく、幾十年間之を見出し得ざるは、甚だしく不運なる者ならずんば、志望を達するの能力なき者なり。幾許か能力を備ふれば、必ず幾許か志望を達すべし。一生涯の事全く志と違ふは、柄になき事を志望せしの誤りにして、斯くまで自ら知るの明なきは到底言ふの價値なし。常識を缺かずんば、さまざま柄になき事を志望せず、力量相當の事を思ひ立てる以上、宜しく日の暮るゝに先んじて遠きに達し目的に達するに務むべし。或は事情の許

さす、中年まで心ならぬ事に従事せざる能はざらんか、老年に及びて奮進するに何かある。日暮れ途遠ければ、燭を照らして進むべし、日の暮ると否とを問ふを要せず。餘命幾許もなく、歎ぜざらんと欲して得ずと言はんが、如何にして餘命を知るべきや。人は何時死せずと限らざるも、醫師の死期を宣告せざる間、愈々何時死すべきやを決定すべからず。五十にて始むるは晩からず。六十にて始むるも晩からず。七八十にて尙ほ必ずしも晩からず。苟も志あれば年齢に關せず、平然として著手すべし。老年にて事を成せる例は多く之れ有り。

—『日本及日本人』

○事業と人

金を得るが爲めに勤勞するは善し、營業に専らなること何の咎むべき無し。されど營業に専らにして事業を以て世に貢獻しつゝありと考ふるは、大に心すべき事なり。事業は事業たるも、特別に其人を要せざるは、其人に感謝すべき理由なし。從來相應に大なる營業家あり、各々種々の事業を経営しながら、世に存在を認められざるの多きは何ぞ。世の知ると否とは重きを置くに足らざれど、其間幾分の意義あるに非ずや。常陸山なり、太刀山なり、車夫馬丁にも知られたりとして、其れ丈け敬意を表すべくも無きが、彼等の知らるゝは、事の彼等に限るあるが爲めなり。金殿玉樓の紳商が有れども無きが如くなるは、其の生死の世に關係なきを示す。——『日本及日本人』

○生命の幅

徒らに生命を長くしたりとて何かせん、考ふべきは如何に幅を廣くするかに在り。脳髓が狭き頭蓋骨に圍まれて發達すると同じく、内容の充實に於て限り無く、之を圖にすれば無限を示す、人は各々生命の幅を廣くするを以て文明の進み、今日の文明を見、尙益々將來に期す。

——『日本及日本人』

○發達の二要素

人事は一概に言ふを得ざるも、自ら守る所なきは、頻りに活動する割合に纏まりたる事業を遂げず、而して變ずるを知らざるは、孜孜營營として務めながら、事業の見るべき無し。眞に保守と稱すべきは、

○變化と進歩

必ず進歩する所あり、眞に進歩と稱すべきは、必ず保守する所あり、能く守る者は必ず能く攻め、能く攻むる者は必ず能く守る。恰も有機體の如し、凝結して金剛石と爲るべき炭素と、常に游離せんとする窒素と、相ひ抱合し、一定の形體を守りつゝ、活動して已まず。最も猛烈なる火藥は、炭素と窒素との抱合に妙を盡くす。頑守せんとせば飽まで頑守し得べく、爆發せんとせば飽まで爆發し得べく、茲に發達の顯る。——『日本及日本人』

普通に變化と進歩とを混同し、徒らに變化するを進歩的と稱するが、是れ進歩的の名の美にして、而も進歩的人物と稱せらるゝ者の案

外に見るべき事業なき所以なり、短艇競争に於て急に針路を變ずるを忌むは他なし、爲めに進行の情力を減じ若くは失ふを以てのみ。對手の行動に應じ、針路を變ずべきも、萬己むを得ざる場合の外、成るべく情力を持續するに務めざるべからず。奇勝を制せんとし、頻りに針路を變ずるは、概ね失敗に終り、時に成功するは僥倖に出づ。

—『日本及日本人』—

二様の固定せる生活

○二様の固定せる生活

同一事を繰返すは、最も容易にして、隨て苦痛も少けれど、其れ丈け愉快も少く、練習を要せざる職業なれば十歳よりし、練習を要する職業なれば二十歳若くは二十五歳よりし、爾後變化なくして経過する

が、貧賤なれば、同一事を繰返すの即ち苦痛を繼續する者、富貴なれば、同一事を繰返すの即ち愉快を繼續する者なるかに考ふるあるも、貧賤も慣れて苦痛ならず、笑ふことあり、歌ふことあり、貧賤なるの色に現はれ、而して苦痛なるの色に現はれざる、以て其の苦痛を感じざるを察すべし。富貴なるは、富貴なるの色に現はるよも、特に愉快なるの色に現はれず、上品とか、立派とか見えつゝ、何處となく憂鬱なるあり、何處となく冷血なるあり、特別に愉快と思はれず、同一事を繰返すは、貧賤にも在り、富貴にも在り、共に不安の相なき代り、眉間に希望の光の輝かず、長壽を希ふも、幾年を以て何事かを成すを欲するに非ず。年々同一事を繰返へし、何時までも之を繰返さんとす

るのみ。身體の上に長命短命の差別あるも、生活状態の上に之れ無し。生まれて魯鈍なるあり、伶俐なるあり、同一事を繰返すにも種類あれば、生命の長短が生活状態に與からざるは同じ、稍と劣れるは生涯吳下の阿蒙たるを免れず。初め皆な齊しく吳下の阿蒙たるも、日を経て阿蒙より遠ざかり、或は三日見ずして刮目せしむるあり、又た昨々年も阿蒙、昨年も阿蒙、今年も阿蒙、阿蒙かや阿蒙かや何時來て見ても阿蒙かや、阿蒙たらずとも、少しの進境を見ざるあり。貧賤の家いへに生まれて生涯阿蒙たるあり、富貴の家いへに生まれて生涯阿蒙たるあり。——〔日本及日本人〕

○書籍、新聞、雑誌

意見の纏まとまれる者は、書籍とし出版せられしも、今は何事も靜せい的てきよりは動的どうてきにして、幻燈げんとうが活動寫真くわつどうしやしんと爲なれるに異ことならず。書籍しよせきに専もつらなれば、世よに取り残のこさるゝを甘んぜざる能あたはず。取り残のこさるゝは必ずしも惡わるからず、壺中こちゆうの天地てんち亦またた樂たのむべし、徒いたづらに時流じりゆうを遂おつて狂奔きやうほんするの誠まことに憐あはれむべき沙汰さたなれど是れ自ら命いのちに安やすんじての事ことにして、取り残のこさるゝを甘んぜず、動的どうてきの世よに動的どうてきに處しよせんと欲ほつせば、常つねに新あらたなる出來でる事ことに注意ちゆういせざるべからず、如何いかに新聞しんぶんに弊へいあるにせよ、新聞しんぶんを讀よまざる者の世よと隔へたたれるが如ごとく、如何いかに雜誌ざつしの雜駁ざつぱくなるにせよ、雜誌ざつしを讀よまざる者は、世よと遠とほざかる。——〔日本及日本人〕

○報復と勝利

ジョンソンが字典を完成し、チエスタフィールド伯の保護者らしく粧ふに對し、保護者とは人の水中に苦悶するを傍觀し、岸に上るを視て遽に援助する者なるかと言へりし時、報復の方法を得たるを感じたらん。ゾーラは今も疑問なれど、死するまでアカデミーに排斥され、死してパンテオンに葬らるゝに決したる、若し彼にして知るあらば、勝利を得たるに満足せん。——〔日本及日本人〕

○差違の生ずる所

何の事業に於ても、地平線に没すると、其上に出づると、力行の多少にて分かれ、地平線を少しく出づると、多く出づると、亦た力行の多少にて分かる。才幹及び知識に特別の差違なく、而して成績の上に大

差違の生ずる所

なる差違あるは、運不運を外にし、一に此邊よりす。

——〔日本及日本人〕

○屈すること久しくして伸ぶること大

怠りつゝ三年間に爲す所は、勉めつゝ一年間に爲す所に若かざるも同等に勉むるに於ては、一年なるは三年なるに若かず。同一の能力及び勞力を以て早く利益を得るは、早く利益を得ざるに比して準備の足らず、其れ丈け後に伸ぶること多からず。凡そ小器は夙成し、大器は晩成す。優良なる小器は劣等なる大器に勝るも、何物か優良なる大器に勝るべき。事情の複雑にして、浮ぶべき者の沈み、沈むべき者の浮ぶことあるが、多數の上よりせば、早く能力及び勞力に比例して相當

屈すること久しくして伸ぶること大

の報酬を得ざる者は、之を得る者よりも後に伸ぶるを得べし。星亨氏が最後まで志を得ず、遂に非業の死を遂げながら、今尚ほ絶えず追憶され、若し星あらばとの歎聲を聞くこと屢よにして、原松田等諸氏より重きを置かるゝは、此等の諸氏に比して困難に堪ふること久しく、元勳も之を威壓し得ざりしを以てなり。能力の足らず、勞力の足らずんば、如何に久しく窮境に在るとも、何の言ふべき無く、運命の當然とすべきも、能力に於て尋常に優り、勞力に於て尋常に優り、而して絶えず壓迫を被りて伸びざるは、苟も能く壓迫に堪へ、之を抵排するを得んか、大に伸びざらんと欲して得ず。——『日本及日本人』

○人間の廢物利用

人間の廢物利用

社會に無用の人物あれば其丈け社會の損失なり、廢物利用は先づ人間に於て考ふべし。無用の人物は謂ゆる穀潰しなる者、富貴にして無用なるは穀を潰すことも多かるべきが、さりとて各々生命を保つ權利あり、何ほど穀を潰すも他より之を如何ともするを得ず。而も糞尿とても利用の道あり、特に同胞人間は互に相ひ助けて益を受くべし。老朽なり、若朽なり、徒らに朽廢するに任かすは、心なき所爲ならずや。——『日本及日本人』

○獨逸の必勝論

獨逸の必勝論

軍備を競へる列國の中、最も明白に到著點を考へしは獨逸にして、彼は信ずらく、苟も軍備を修むる以上、必勝を期せざるべからず、敵

の侵略を防ぎ、若しくは互角の勢を以て戦ふは、損を少なくするのみにて特に益する所なし、唯絶対的勝利を得る者が絶対的権利を握り、以て何事をも決定するに堪ふと。直間接に獨逸帝國の建設に與れば、皆期せずして斯く考ふるに至るべく、ニーチエの如き、其趨勢に流れし一扁舟のみ。獨は他と戦ふが爲めに軍備を修めず、他に勝つが爲めに軍備を修めぬ。如何に佛と戦ふべきかを考へず、如何に佛に勝ち、其富を奪ふべきかを考へて已まざりき。——〔日本及日本人〕

○志と抵抗

志こころざしのせう小なれば抵抗ていかうのすく少なく、志こころざしの大だいなれば抵抗ていかうのおほ多く、志こころざし愈いよく大だいにして抵抗ていかう愈いよく多おほし。——〔日本及日本人〕

志と抵抗

佛人の夢想

○佛人の夢想

普軍ふぐんがエーナに敗れし時、ルイザ皇后は歎じて曰へりき、吾人はフリードリヒ大王の月桂冠の上に眠れりと。實に當時の普人は唯大王の戦勝を追憶し、依然強兵を以て居りしなり。佛人は奈破崙大帝の月桂冠の上に眠れる者、帝の攻伐を夢み、兵力を以て歐洲に冠たるべきを考ふるも、唯だ斯く考へ、斯く人に語るのみにして、眞に突進すべきを思はず。——〔日本及日本人〕

○腹藝の有無

團十郎の言はず動かずして観客が固唾を呑みしは謂ゆる腹藝なり、他の俳優が言はず動かざれば、観客皆欠伸せん。

腹藝の有無

運か不運か

○運か不運か

運不運といへば、一應理解すべきが如くなるも、少しく立ち入りて考ふれば、其の運不運の眞に運不運なるや、頗る疑はし。富貴に生るるは幸運なるも、爲に天稟の能力を伸ばし得ざる者幾人なるを知らず。貧賤に生るゝは不運なるも、額に汗して百練千磨、伸ばし得る限り能力を伸ばすあり。——『日本及日本人』

——『日本及日本人』

人生の職分にして快事

○人生の職分にして快事

實力を以て虚勢に勝ち、實質を以て虚榮に勝つは、常に人生の職分なるのみならず、其の最大愉快の一なり。天下の政權を争ふより、八

資金と人

○資金と人

公熊公の腕力を闘はすまで、一も然らざる無し。必ずしも愉快を感じずと思はず、或は公憤なりとし、義理の爲めなりとし、己むを得ざるに出づるとし、能ふ限りの苦痛を忍ぶも、苦痛の裏に自ら慰藉して満足するの愉快あり。——『日本及日本人』

資金ありて事業の起らず、起りて経営に苦むは、發意者及び經營者其人を得ざるに因る。其人を得るに於ては、絶えて世間に需要なくとも、人の注意を促し、需要を起さしむるに難からず。

——『日本及日本人』

希望を囁せらるゝと囁せられざると

○希望を囁せらるゝと囁せられざると

人と力行

希望を囑せらるゝの可なるか、囑せられざるの可なるか。大に希望を囑せらるゝは大に失望を招くの恐れあり、さりとして全く希望を囑せられざるは、概ね凡庸の徒なり。——『日本及日本人』

歸去來辭の眞價

人が歸去來辭を賞賛するは其の朗々誦すべきの外、退く易きが如くにして意外に難きを察するに出づ。——『日本及日本人』

○十年の後より顧みたる現在

今日爲さざるも明日ありとし、今は雌伏するも他日雄飛すべしとして、空しく想像を逞くするは、少しの效能なきが、さりとして將來の事の全く知り得ざるに非ず、曆は萬年の後をも知るべく、百年の後の知るべ

十年の後より顧みたる現在

意氣地なき境遇

○意氣地なき境遇

きは種々、十年の後の知るべきは愈々多し。假りに十年後に顧みて如何と観る。現に爲しつゝある所の無意義なるを覺ゆる無きや。識力の強き者あり、識力の弱き者あり、弱き者が十年後を想像し、顧みて今日の状態を察すれば、賤劣なる事を優秀と思ひもせんが、尋常の識力を具ふる限り、甚だしく妄想を逞くするに至らずとし、時に將來の事を考ふる方、現在の事を爲すにも益あり。人々各々將來の事を考へ五年計畫、十年計畫を云々するも、單に事業上に於てせず、我が現在の状態が後より顧みて如何なるべきやを考ふべし。

——『日本及日本人』

學窓を出で、直ちに官廳に入り、鰓上りに上るは、安心は安心、同窓の友に羨まるゝ所なるが、世の風波に遠ざかり、獨立して事を成すに堪へず、上官に引立てられ、上官に罷免され、恩給にて餘生を送るが如き、何等意氣地なき境遇ぞ。嘗て次官局長に上り、現に何を爲しつゝあるやの知られざる、嘗に五六のみならず、仕官の羨むべからざるの甚だ明白なるに、尙ほ孜孜汲々、文官試験を受けんとするは、就職難の迫るが爲めにせよ、近きに惑ひ、遠きを忘れたるに非ずや。早く易きに就くは、運命に屈從する者にして、運命開拓の何たるを理解せずと謂ふべし。——『日本及日本人』

無意義なる羨望

○無意義なる羨望

富家に生るとは、貧なる者の殆ど悉く羨み、夢にも之に類似したしと思ふ所、其れ丈け幸運なりとすべけれど、富家に生れし者の成長して平凡の生活を送るを察すれば、曩に羨みし何の爲めなるやを解し得ざることあり。——『日本及日本人』

○二つの道

過去にても、現在にても、將來にても、人の行くべき道を二種に別つ、一を既成道路、一を新たに造るべき道路とす。世俗の謂ゆる最上の位置は多く空名に屬し、實力の如何を表示せず、實力を恃む者は空名の外に考ふる所あるが、此等は既成道路を行くを欲せず、成るべく自ら道路を造らんと欲す。既成道路は最も安全にして、安全なるを行くの普通

なれど、其の安全なるは己れの力に依らず、己れの存在する否と何の關係なし。之に反し、新たに荆棘を闢いて道路を造れば、邊僻にして人の多く通行せずとも、人文を進むるに與かりて力あり。道なきが爲めに無人なりし土地が、道の開けしが爲めに村落の接續せりといふ例に乏しからず。既に開墾し盡くし、少しも改善の餘地なきは格別、然らざる限り、新たに道路を造れば必ず何事にか利益を與ふる所あり。既に開墾し盡したらば、去りて未開の土地に行くべし。既成道路を修繕して宜しきを得るは、新道を開くに劣らざるも、苟も新道を造るの必要ある處は進んで之を開くべし。力ある者は先づ新道を開くに務め、次いで舊道を修むるに務むべし。人跡なき處に足を印するほど、力あ

穩當なる復讐

る者愉快を感じる無し。——（『日本及日本人』）

○穩當なる復讐

憤怒して志を立て能く事業を成就するあり其の憤怒するは自ら益し、事業に於て世に益するが、侮辱を被れるとて直ちに加害者に復讐せず、事業を以て之を凌駕するは、復讐の最も穩當なるものとす。社會の秩序を紊さずして社會に利益を與へんには、怒りて不可なく、愈々怒りて愈々可なり、後藤良山、錢一百貫文を束脩として名古屋立醫に調を求む、立醫束脩の少きを以て會はず、良山怒りて曰ふ「立醫鼠輩、人を知らず」と、爾來日々研究し、大に得る所あり、後ち執政、幕府に薦め、給するに千石の祿を以てせんとせしも、固く辭して應ぜ

ざりき。良山の頭角を抽でしは單に立醫の無禮を怒りしが爲めならず、良山の如く怒りて良山の如く成功せざる者の多きは、腹立つのみが能事ならざるを示す。良山の家、十年間に七度火災に罹り、家財蕩盡す。父母を奉じて京都に到り、慨然として曰ふ、「儒と爲らんか、伊藤仁齋に若かず、僧と爲らんか隠元に若かず、已む無くんば醫か、醫は豪傑の士の先鞭を著けざる所なり。」と此の大志を懐いて立醫の門に到り、而して拒絶せられたればこそ、怒るも尋常ならず、怒りて能く立醫を壓倒するを得たるなれ。立醫が良山の成功を如何に感ぜしやは確め難きも、必ず悔いたるべく、而して其の悔ゆるは良山に於て充分に復讐の目的を達し得たるなり。——（『日本及日本人』）

氣力ある者の快とする所

○氣力ある者の快とする所

適材の不適處に置かるよは、多くの場合、己れの罪ならずや。不適處なるも、自ら不適處なるを感ぜずんば致し方なし、若し之を感ずれば、進んで適處を求むべし。世は廣し、人は多し、日本のみにて人口六千五百万、其間何ぞ己れを知る者なからんや。適處を求むれば必ず之れ有り。されど己れを知る者あるも、人は各々爲すべき事あり、己れの事は己れ自ら處すべく、己れの適處は己れ自ら求むべし。借屋を求むるが如く容易ならざるも、事業は借屋と違ひ、多少の困難あるは豫め定まる、全く困難なきは言ふに足らざる事なり。多少困難を忍ぶべき素質ありながら、唯だ易きに就き、唯だ凡常に甘んずるを何と見

るべき。稟性及び境遇にて如何ともすべからざるあれど、氣力ある者は、生まれ甲斐ある事をすべきに非ずや。祖徠は豆を嚙りて古今の英雄を罵るを愉快とすと曰へり、罵らずして自ら古今の英雄に列するも亦た愉快ならずや。英雄といひ、聖賢といひ、名人といひ、彼れ何者ぞ。我れ何者ぞ、十たびして能くせざれば百たびすべし、尙ほ能くせざれば千たびすべし、此間無氣力者の味はざる愉快あり。凡々たる平凡にも愉快あり、山の頂上よりも麓に愉快を感すべし、唯だ事成らずと定まりて後に味ふも遅からず。——『日本及日本人』

○各人の力を致すべき所

各人の力を致すべき所

蟹は甲羅に似せて穴を掘る、人は各々己れの關係する所を重大視し、

他の如何を問はざるが、斯かるは事の然るべき所にして、各々重大問題とする所に充分の力を致してこそ解決を見るを得るなれ。

——『日本及日本人』

人間の偶然的假裝

○人間の偶然的假裝

財多き者は殆ど往く處として意の如くならざる無く、謂ゆる多錢善く賈ふの事實なるを認むべきも、財多くして意のまよにし、而して一朝之を失ひて路頭に迷へるも少からず、之を失はずとも、何時失ふべきかの測られざるもの、斯かる果敢なきものを蓄積して幾億に及ぶも、唯だ其の儘に経過するに於て何の稱すべきを見ず。ロックフェラーは二十億圓の富と稱し、世界に冠たるべきも、後世ルーズヴェルトと同

格に推重せらるゝやの疑はしく、或は降ること數層ならんも量り難たし。官位の高き者も往く處に歡待され、願にて人を使ひ得んも、これ亦常に恃むべからざるもの、免官と共に昨の諂佞者をして今の讒謗者と爲らしむるの多し、果敢なきものは至高の地位に達するも知るべきのみ。弓削道鏡は最初の太政大臣たれど、其の故を以て貴しと思はれず、爾後太政大臣の幾十を以て計へらるゝも、記憶すべきもの幾人もなし。歴史上何人が如何なる官位を占めしやを穿鑿するは煩はしくして厭ふべきを覺ゆ。一時の假裝は有りとも無くとも人の眞價に損益する所あらず。爲朝が藏人を受けず、吾れは鎮西八郎にて可なりと言ひしは、實に世態の眞相を看取せしなり。偶然的なるは偶然に來り、偶

然に去る、早く忘れらるゝは事の然るべき所となす。

—『小泡十種』

敵として
欲しきもの

○敵として欲しきもの

孟子に君子有終身之憂、無一朝之患也、乃若所憂則有之、舜人也、我亦人也、舜爲法於天下、可傳於後世、我由未免爲鄉人也、是則可憂也、憂之如何、如舜而已矣とあるが如き、舜を以て競争の目的物とするもの、若し競争の目的物を以て廣義の敵とせば、斯かよる善き意義に於て舜を敵とせるに非ずや。此類の敵あるは、之れ無きに優ること言を待たず。——『日本及日本人』

○神にも敵あり

人と力行

神にも敵
あり

神は人の想像して至善とし又至強とするもの、何者も恨まず、何者も抵抗し得ざるべくして、而も人は之に對する敵を想像せざらんと欲して得ず。——（『日本及日本人』）

推移と抵抗

○推移と抵抗

聖人は世と推し移ると云ふこと、尤もらしく聞えて世に禍する者と少からず。變化に順應するは變化の力を利用する者なれば、力は變化のみに現はれず。變化に抵抗する所にも現る。進善に従ふべく、退惡に反すべし。唯時勢として従ふは時にナイヤガラに向て下るが如きを免れず。清朝の滅亡は皇族が悉く世と推し移りしに出づ、若し一人の奮て抵抗せしあらば、或は帝系を維持し得たるべく、勢の不可に

金よりも事業

して倒るゝとも、尙雙方必死の力を竭す丈け、支那國民を刺戟し、其の元氣を鼓舞するを得たらん。支那の振はざるは有力者が世と推し移るに汲々たるに由らずとせず。——（『日本及日本人』）

○金よりも事業

金を崇ぶは文明國の風なりと過信し、一意金錢の蓄積に勉むる者あるが、金錢を蓄積するは特に其人なくとも能くすべし、千萬圓の金を蓄積せんとせば、銀行をして集めしめて妨げなし。人として爲すべきは金を蓄積するの事ならず、金を以て如何に世に處すべきかど要點たり、宜しく金を重んずることを止めて事業を重んずるの風を養ふべし。世界に於て金を重んずる者は支那人なり、歐米人の金を重んずる

こと洵に此に譲らざるも、事業を興す念の金を重んずるの念に勝つ者多し、是れ即ち其國の益と進歩し益と隆盛に向ふ所以なり。嘗に國家のみ然るに非ず、個人としても亦た同じく、金よりも更に事業を重んずる間、其の人の益と進歩するを期すべきも、事業よりも更に金を重んずるに至りては、既に其の人の終りに近けりとすべし、孔子の血氣衰ふる之を戒むる得に在りと言へるは即ち是れなり。——（『偉人の跡』）

文明の幸不幸

○文明の幸不幸

徒歩にて一日十里を行くと、汽車にて一日百里を行くと、幅に於て大に違ふも、孰れの多く幸福を感すべきか。汽車の四通八達する時代、乗車賃なくして乗るを得ざるは不幸を感ずれど、彌次喜多の愉快は今

英雄の事功と文人の事功

○英雄の事功と文人の事功

軍人若くは政治家としての活動は、大は則ち大、眞に蓋世の雄を以て目すべきあれど、内情を査察せば、多數人の運動に従ひ、之を代表して顯はるとに止まり、一個人として何等かの力あるも、多數人と與

に俱にせずんば、何の成す所あるを得ざりしならんとも察せらる。國
 亡び民散りて英傑の名の遺れるの少からざるも、年代と共に漸次湮没
 するを免かれず、其の赫赫として當世に耀き、尙ほ後代に傳はりなが
 ら、動もすれば文人に譲らんとする觀あるは、多數人に依頼せるが故
 なるべし。東西諸國、各々英傑として崇拜せらるゝあるも、最も人々
 の間に傳稱せらるゝの何人なるかを問へば、則ち文人却て軍人及び政
 治家の上に位すと爲さざる可らず。司馬遷は史記傳中の豪傑よりも知
 られ、蘇東坡の赤壁賦は赤壁の戰爭よりも知らる、個人の實力は群集
 の運動よりも認められたるらし。シエクスピヤの廣く知らるゝも、
 單に作物が娛樂の用に供せらるゝが故ならず、一齣一句頭腦より涌き

才人の不幸

出で、彼あらずんば此あるを得ざるものにて、幾分か時勢に據れるに
 相違なきも、其の傑出せるは僥倖にあらず、實力に基づけりとして謬
 らず。音樂に於けるモツアルト、ベートーフエン等の世間的豪傑を凌
 がんとするも此と同じ、孤立援なく、作る所悉く天才の結晶たれば
 なり。此等は皆な其人ありて始めて其事あるもの、其人あらずんば長
 へに其事あるを期すべからず。夫の英雄豪傑が多數人の力を藉りて遂
 げし事功の上に己れの名を冠せると趣を異にす。——(「偉人の跡」)

○才人の不幸

才は難たし、之を用ゐること一層難し。多才多能の士にして自ら用
 ゐるの宜しきを得ず、小才と擇ぶなきに終はること、勝へて計ふべか

らず、萬能餘りてありて一心足らざるの語、時として適中するを見る。蓋し人は能不能の別あるも、勉めて怠らずんば何程か成就すべく、特に生れながら才能を具ふる者は勉めずして常人に超出するを得べきが、隨て世に一種の能者あり、或る一事に著手して思はしからず、則ち去りて他に赴き、尙ほ又た思はしからず、更に去りて他に轉じ、其の轉徙する間、一々嶄然として頭角を露はさざるあらず。かくて一事に定住せず、絶えず變化し廻はるは、其の人の自由意志にして、實に好機會に遭逢する所以なりと雖も、其の最も不幸とすべきも亦た此に在るを忘るべからず。——（『偉人の跡』）

利害の打算と急變

○利害の打算と急變

利害は打算すべく、打算せざるの勇は暴虎馮河に類するも、餘りに此邊に注意すれば、小は朝鮮、大は支那と擇ぶこと無し。孟軻が地方百里にして以て王たるべしと言へりしは、手段を説くの粗漏なれど、小國を以て獨立の體面を完くし得べきを信ぜし者にして、當時斯かる思想の行はれたるべく、七國の相ひ争ひ、人物の頻りに輩出し、思想の著るしく發達せしの根據あるを見る。利害は打算すべきも、決意の如何を打算に加ふるを忘るべからず。平素人の力量を計り、男は云々、女は云々、老人は云々、青少年は云々、各々相當の業務に従事せしむるも、火事の場合、弱き者も驚くべき重量を擔ふに堪ふ。一旦緩急ありて平時の打算と趣を異にするも此と同じ。佛國革命は内亂の極り、

外人は誰れとて其の能く他國と戦ひ得るを考へざりしに、四隣より高壓的に壓迫を加へらるゝや大に激昂し、カルノーの下に軍制を整へ、ナポレオンの下に殆ど歐の全大陸を蹂躪し去れり。後より顧みれば、彼の如き場合に彼の如き勢あるの怪むに足らざるも、其の當時識者顔する者も、唯だ佛人の狂奔して國を滅ぼすを知らざるを憐むの有様に、平時と變時と勢の同からざる、以て少しく察すべし。活氣なき國民と、活氣ある國民と、尋常の打算に拘泥すると、之に拘泥せず、別に打算する所あるとにて別かる。朝鮮の如き、打算の頗る簡單にして、支那が日本に十倍以上といふを以て此に従ふを得策とし、支那は更に打算の緻密なれど、尙ほ將卒の數、國庫の出納等を以て上下し、精神

業に専らなるもの

的に何事をか爲し得るを知らず。歐洲は事毎に打算するも、幾許か活機を見るの眼識を備へ、時に小を以て大と戦ひ、弱を以て強と戦ふを辭せず。豫め熟慮しての事なれど、支那人より觀れば、大なる賭博と異ならずと思はる。人事は複雑にして普通の小事にも、底には底もあり蓋もありと云ふ程にて、外形に現はれたる統計のみを以て判断せば、能く機會を失はざらんは甚だ難たし。利害を打算するは善きも、常時の計算と變時の計算との異なるを銘記すべし。——『日本及日本人』

○業に専らなるもの

工場にて頻に時計を視る者は良職工たるを得ず。孔子も發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至といへり。業に専らなる者は日月の

遷るを知らず。——『日本及日本人』

地と人

○地と人

土地には耕し得べくして耕されざる地を耕し、人には發揮し得べくして發揮されざる能力を發揮すべし。——『日本及日本人』

読書は愛動的

○読書は受動的

何の器官も錬磨すれば發達し、錬磨せざれば發達せず。甲を錬磨し、乙を錬磨せざれば、乙は管に發達せざるのみならず、甲の發達する丈け前より萎靡するを免れず。教育の大部分は讀書に存し、讀書は受動的に知識を得せしめ、能動の力を減じ、進んで爲すことを厭はしむ。讀書は知識を得るに缺くべからざるも、試験の制裁の下に全力を讀書

読書よりも魂

○読書よりも魂

に致し、朝夕誦誦を事としては、恰も催眠術に罹りし者が命令の儘に何事をも爲し、命令なければ單に同一状態を繼續するが如く、命令を受くる毎に盤根錯節を解き、苟も命令を受けざれば、茫然として爲す所を知らず。——『日本及日本人』

疑惑より進歩

○疑惑より進歩

萬卷の書を讀破せざれば道理が判らぬといふ、萬卷の書を讀破せざれば道理の判らぬ者は、萬卷の書を讀破せるとして道理は判らぬならん、一分の蟲にも魂はあり、ひたすら讀書を以て知見を磨かんとするは、男一匹の直打なし。——『小泡十種』

些少の事件にも尙心配し後悔すること有りとせば、乾坤の大を究むべき哲學の思想に於て、異論紛議の絶えず繼起するは、至當の事にして、甲論乙駁輒く判定しがたきを以て哲學の假空なるを證せんには、昨是今非喜憂の常ならざるを以て人生の無益なるを唱へざるべからず。人誰か艱苦なからん。發憤して快樂の域に到達するを上智と爲す。哲學何の世か疑惑なからん。虚實を判別して普遍の眞理に近くを進歩とす。——『哲學涓滴』

一層安全なる修業

○一層安全なる修業

封建制度若くは之に類似せる階級制度なれば、受動的なるの却て世に立つに便利なることあり。服従といひ、柔順といふは、美德と稱せ

他の不徳を責むるもの

らる。而も今は然らず、舊に依りて服従の美德なるも、唯だ命に之れ従ふよりは、紛々擾々裡に健闘するの望ましきこと多し。國內到る處、柔順なる職工店員を求むれば、現代の教育にて充分なるも、各々若干の傭人を以て籠城し、他の入込むを拒絶するの勢にては、傭人に適する事、強ち位置を得る所以の者ならず、傭人に適するが如く教育され、而して傭人たるを得ずんば、頗る窮せずや。柔順なる傭人たるの惡しからざれど、今は傭人たらんとして修業せず、初めより獨立自營を期し、専ら其の方針に於てする方、一層安全ならずや。

——『日本及日本人』

○他の不徳を責むるもの

人身攻撃は慎重にすべし。讒謗罵詈は紳士の恥づべき所なり。己れの欲する所、之を人に施すべく、己れの欲せざる所、之を人に施すべからず。自敬自尊の必要なれば、他敬他尊の必要なるも亦た明けし、されど徳義を重んずる者は、不徳を憎むこと徳義を軽んずる者より強し。徳義を軽んずる者が人の不徳を恕するは、自らの良心の癩痺せるに出づ、何の稱すべきか之れ有る。不徳を責むるは即ち徳義にして、之を責むること愈々強く、而して愈々徳義に厚きを覺ゆ。

—『日本及日本人』—

○春風の心と秋水の腦

春風の心
と
秋水の腦

膽を大にし心を小にすべしとは、意義の解すべきも、之を人に説明

し易からず。心を温くし腦を冷くすべしといふも此と列を同じし、精神を心臓及び腦髓に歸せし往昔の習慣に由来せるが、情及び智に配當すれば少しの不可なし。温心冷腦の必要は語の如何に拘らず、人の一般に認むる所、解せざる者には、更に語を換へて曰ふべし、心を春風の如くし腦を秋水の如くすべしと。冷腦といふと略ほ同意義にて俗にクリヤー・ヘッドといふか、鋼鐵を斷つが如き秋水は冷にして明晰、凡そ判斷は宜しく斯くあるべきに非ずや。而も情は和暢なれよかし。

—『日本及日本人』—

○自己の職業をして愈々高からしめよ

自己の職業
をして
愈々高から
しめよ

書生ととと輕蔑するな今の大臣參議は皆な書生、明治の初めに斯く

諸ひしは當時大臣參議を最上とせし者にして、後の就職難を歎じ、生活難を歎するに比し、意氣の壯なるを見るも、尙ほ社會の狀態の簡單なりしを示さずとせず、今は痛切に就職難を感じるあり、之に同情せざるべからざる理由あると同時に、大臣と同等以上の位置の各方面に備へられ、未だ備へられざるも、之を備ふるを得べし。就職難を胃かして就職するは一快事、己れの従事する職業をして政府の最高職に相當せしむるは更に愉快、其の上に出づるは愈益と愉快、而して斯かるは單に己れ一個の愉快に止まらず。——『日本及日本人』

事業、職業、營業

○事業、職業、營業

事業といひ、職業といひ、營業といひ、語の異なれば意義も異なる

人皆爲すことあらんとす

べきが、世に異語同義なる者あり、三者も屢々相ひ混同するを免れず、されど異語同義なる者も全く同義なるに非ず、或る程度まで相ひ似たるのみにて、中に相ひ似たりと見えつゝ甚だしく相ひ違ふあり。幾分か相ひ似たるを以て全く相ひ同じきかに取扱はんか、識らず知らず大なる誤謬に陥る。事業を職業とし、職業を營業とする者の多からざれど、營業を職業とし、職業を事業とする者は、到る處に之れ有り、誤解の弊や少からず。——『日本及日本人』

○人皆爲すことあらんとす

人類は皆爲すことあらんとす、爲さんと欲して爲し能ふ者あり、爲し能はざる者あり、成功は區々に屬すと雖も、爲すことあらんとする

に於ては、遂に疑ふべき者なし。而して権力を振ひて、百事意の如く措辨せんと欲するが如きは、人情の多く望む所なり。是を以て九五の位に坐して南面王を稱し、百億生靈の安危休戚を身に繋ぎて、宵肝治を圖り、威武外に輝き、治具内に備り、天下太平を謳歌して、長く賢主名君の名を留めたる者、鮮しと爲さず。宰相として政機を把り、良猷嘉謀、能く補弼の任を盡したる者、亦た鮮しと爲さず。萬軍に將として、機を視ること神の如く、計を帷幕に運らして、勝を千里に決し、攻城野戰到る所に功を奏したる者、亦た鮮しと爲さず。貨殖億萬、一國の商權を握りて、富王侯に比せる者、亦た鮮しと爲さず。水を治めたる者、道路を開鑿したる者、器械を發明したる者、亦た又た鮮しと

實力なきもの、あるもの

天爵と人爵

爲さざるなり。而かも之を仰げば、彌高く、之を鑽れば、彌堅く、一世の師表として徳化四方に布き、端拱令せずして行はれ、布衣權なくして人影の如く従ふ者に至りては、殆ど絶無にして稀に之れあり、

——『王陽明』

○實力なきもの、あるもの

實力なくして位置を占むる者は虚勢を張り得る間に愉快を感じ、實力ありて位置を占めざる者は虚勢に勝つ所に愉快を感ず。

——『日本及日本人』

○天爵と人爵

人爵の効力は争ふべからず、宮中の待遇は勿論、商店にも、旅館に

人と力行

も、明白に認むるを得るが、尊敬する範圍は狭く、尊敬する期間は短かしの。人爵の多くしては人は一々之を記憶するの煩しさに堪へず、爵位の高きとなく、低きとなく、唯だ其の實力の如何を察し、實力の多きを優れりとし、實力の少きを劣れりとし、藤原鎌足は大織冠を以て貴からず、豊臣秀吉は太閤を以て貴からず、人は大織冠といひ太閤といふを苗字の如く考ふ。徳川將軍は内大臣右近衛大將征夷大將軍淳和獎學兩院別當左馬寮御監源氏長者といふが如き肩書にして、中に太政大臣たるあり、位階も之に伴へるが、今日何人の之を記憶するか、弘法といへば大師、大師といへば弘法、他の幾多大師は有れども無きが如し、日蓮は大師たらざるを以て何の損する所無く、大師の多く忘れ

られ、俗に兩大師糞大師といふに、日蓮は益々顯はれつゝあり。支那の人物は多くの肩書あるの常なれど、之を記憶するは漢史専門家さへ猶ほ困難とする所、孔明は孔明にて足り、岳飛は岳飛にて足る。ウエリントンは公爵として死し、ネルソンは子爵として死せしも、何人も爵を以て之を軒輊せず、英人が感謝の意を表するは前者よりも後者に篤し。奈破崙三世の朝、新たに華族を作りマクマオンなり、バセーヌなり、皆な公爵に列せしが、爵の事は今全く忘れらる。古來發見發明に功ある人々の概ね人爵なきは、今更ら言ふを要せず、眞に文明に貢獻するは、人爵ある者ならず天爵ある者なりとして妨げなし。人爵は無益ならず、或る時代に社會の秩序を維持するに必要なるも、人爵の

増加するに随ひ、天爵の顯はれ、人爵の愈々増加して天爵の愈々顯はるゝを打消すべからず。——『日本及日本人』

○一種の忘暑

簿書の間(あひだ)に事務を執る者、竈(かまど)に炭(すす)を入る者、自轉車(じてんしゃ)に乗る者、大八車(おほやま)を挽く者、背(せ)に小兒(こども)を負ふ者、活動寫眞(くわつざしん)を興行(こうぎやう)する者、其他(そなた)身を動かす者、爲すべきを爲しつゝある時、暫く暑熱(しよねつ)を忘るゝ、恰も齒痛(あたまがしつう)にて火傷(くわしやう)を忘るゝが如し。——『日本及日本人』

○君子に勇なきを奈何せん

邪(じや)は正(せい)に勝たず、權略(けんりやく)は正義(せいぎ)を壓伏(あつぷく)する能はずといふも、斯(か)く勝敗(しょうぱい)の明白(めいはく)ならば何等(なんら)議論(ぎろん)の起(おこ)らざる筈(はず)なるに、腐腸漢(ふぢやうかん)の跋扈(はつこ)し、濁肉連(だくにくれん)

一種の忘暑

君子に勇なきを奈何せん

穢多組(みだぐみ)の志(こころ)を得るは、必ずや別に事情(じじやう)の存在(そんざい)すべし。仁(じん)が最上(さいじやう)の善(ぜん)と定まりながら、智仁勇(ちじんゆう)を達徳(たつとく)とし、仁(じん)の外(ほか)に智(ち)と勇(ゆう)とを要(えう)す。達徳(たつとく)の三分一(さんぶんいち)を具(そな)ふる者は、其(その)の三分二(さんぶんに)を具(そな)ふる者の爲(ため)に破(やぶ)らるゝを免(まぬ)れず。彼等(かれら)腐腸漢(ふぢやうかん)は固(こ)より仁(じん)ならねど、比較的(ひかくてき)智(ち)ならずんば比較的(ひかくてき)勇(ゆう)、以て憐(あはれ)むべき君子(くんし)を翻弄(ほんろう)し壓迫(あつぱく)するに非(あら)ずや。君子(くんし)は智(ち)あり、敗徳(はいとく)の徒(た)より智(ち)あり、而も屈(くつ)せず撓(たゆ)まず彼等(かれら)と健闘(けんとう)するの勇(ゆう)なきを奈何(いかん)せん。

——『日本及日本人』

○事や必ず成る

點滴石(てんてつせき)を穿(う)つとは事實(じじつ)にして、此(この)諺(ことわざ)は何(なん)の場合(ばあひ)にも當嵌(あては)むべく、無心(むしん)の點滴(てんてつ)よりも更に一層(そう)感情(かんじやう)智能(ちのう)及び氣力(きりき)を加(く)ふれば、事業(じぎやう)の成(な)ら

事や必ず成る

ざるを欲するも得べからず。石の上に三年とは迂愚の極に似たれど、其れさへ尙ほ事の成るを見る、力行して倦まざらんか、事や必ず成る。

——『日本及日本人』

肉欲の快

○肉欲の快

肉欲よりする快樂は或る程度まで愉快なれど、其程度を越えて愉快を感じず、或は自ら制せんと欲して制するを得ず、治療の術なき病人と疑はる。——『日本及日本人』

○大志あるものゝ想望する所

普通の職業を求むるは以て生活費を得、餘分あれば歡樂に供せんと欲する者、斯かるは安樂を求むると謂ふべく、大志ある者の以て人生

大志あるものゝ想望する所

の快事とする所ならず。其の想望して快事とするは、其の境に臨んで何の快樂を覺えず、却て苦痛を感じんも測り難けれど愈々志の高くして愈々快樂より離れんとするも如何にすべき。高山の絶頂は寒冷にして風強く、久しく居るに堪へず。而も健脚なる者は籠に在りて百花の咲き亂るよを觀て満足せず、必ず蒼空を凌がんことを期す。

——『日本及日本人』

○安んじて困難に當れよ

運命を開拓せんとせば、土地を開拓するが如く、一歩々々努力を要す。餘りに早く利益を求めては、伸ばすべき能力あるも、之を伸ばすに至らずして已む。本來腕力の強きあり、弱きあるが、弱き者も鍛錬

安んじて困難に當れよ

次第にて五人十人に敵すべし。才能も秀でたるあり、秀でざるあれど、秀ですとも、大に練磨せば、秀でて練磨せざる者に勝つ。艱難人を玉にすとは、事實の證明する所、少しの疑ふべき無し。艱難を忍耐すれば艱難たるを感ぜず、乳母日傘にて育ちし者が艱難と感ずるは、さまざまの艱難ならず。多少之を耐へ忍べば、何程か運命を開拓すべく、愈々耐へ忍べば愈々善し。運命開拓は深き意義あるに非ず、若し斯くて開拓し得ずんば、是れ眞に不運にして、突然地震にて壓死すると同じ。されど斯かる事は多く有るべくも無し、先づ安んじて人の困難とし避くる所に當るべし。——『日本及日本人』

○増進は健全なる行爲なり

増進は健全

全なる行爲なり

人の生涯は連続の一部なるも、多くの場合に於て同一事を繰り返すべきに非ず、宜しく前人の傳へし所に更に何物をか附け加へざるべからず。前人と同一の能力ならば、必ず何物をか附け加へ得べく、之を附け加へ得ずんば前人より能力の劣り、増進的連續即ち進化の律に外づれたりとすべし。知識に種類多く、或る部分に於て前より劣るの避くべからざるも、他の多くに於て必ず優らんことを望むべし。又た或る部分の俄に進歩するを望み難く、前代の意見を繼承するに止まるあれど、前人の意見を理解して遺さざらんには、優らずとも劣る所あらず、此處に劣らずして他に駸々として進むあれば、進むことありて退くことなし、哲學の方面は、或る部分に於てカントより進まず、此よ

り出立して失敗し、又た出立點に歸ることあれど、カントの想ひ及ばざりし事の現に知られたるの少からず。特に科學の進歩は同日の談にあらず、今日兒童の知る所にして當時有數の識者の知らざりし事あり、其の認識論に於ける影響一にして足らず。故に問題の種類は深く問ふを要せず、何にせよ前人の遺しと所を繼承し、此に或るものを附け加へ、之を後人に遺すべし。前人の遺しと所に安んじて何物をも附け加へざるは、初より生まれざるの簡單なるに若かず。人は連續的に生々死々して相ひ繼承するもの、後者は前者の事を承けて或るものを附け加へ、後ち更に附け加へ、又た更に附け加へ、順次附け加へんこと、今日の見解にて人の健全なる行爲となす。——〔宇宙〕

○力行不惑

往昔富士の卷狩に頼家二鹿を射殺す。頼朝喜びて之を鎌倉の政子に報ず、政子曰ふ、將軍の子が二鹿を射殺すと何か有る、報すべき程の事ならずと。女性として冷酷に過ぐるも、當時關東の兵の海内を制するの偶然ならざるを示さずや。スバルタの兒童は或は己れの劍の短きを歎ず、其母は曰ふ、一步踏み込めば可なりと。楯を手にして還らさんば楯に乗りて還れとは、母が別れに臨みて子に告ぐるの言なりき。實に戰陣に在りては、唯だ進んで戦ふべく、退いて還るを望むべからず。支那に背水の陣といふは彼の如き民族を戦はしむるに先づ退路を斷つを要するなり。遁がるよを得ざれば戦ふべく、日本との戦役に、

海軍の陸軍よりも健闘せしは、艦外に通がるよを得ざりしに出づ。平和の戦争に於ても、進むよりは退く易く、豫め退く意ありては遂に勝つべからず。百年成之不足、一日壞之有餘の語あるが如く、一たび怠りて廢すれば前の努力悉く無用に歸す。功を一簣に虧くといふも此の意義なり。一簣に虧くは、大事にも然り。小事にも然り。一たび著手せば、其の完成するまで唯だ進むべく、斷じて退くべからず。進行の間、困難あり、誘惑あるも、敢て惑ふ所なく、一定の方針を指すこと、之を力行不惑といふ。——『日本及日本人』

久しくして徴あるもの

功勞は早く顯はれ、早く消ゆるあり、晩く顯はれ、永く消えざるあり、徳を以てする感化は、一時に效果なく、久くして徴あり。

——『日本及日本人』

肉と骨

○肉と骨

圓満なるは安全なれど、盤根錯節を斷つには鋭角なる刀劍に若かず。人に骨あり、肉あり、孰れかの一方にて不可、相交はりて體格を形成す。骨は硬きを貴び、軟きを卑む、軟骨漢は爲すこと有るを得ず。英國の紳士は紳士の標本と稱せらるゝが、其の紳士は徒らに辭令に嫻はず、食事の末にまで禮を事としつゝ、蠻人と腕力を較べ、蠻人と同じく露營するに堪ふ。紳士たるには、人に相槌打ちて演劇談し、骨董談するのみにて足らず、千萬人の反對するとも我れ往くの概なかるべか

自ら知らざる所

らず。——『日本及日本人』

○自ら知らざる所

人は皆自ら知らざる所あるを知り居るべき筈、孔子が知らざるを知らずとするは是れ知るなりと言へる、誠に名言と謂ふべし。萬事萬端知らざる有らずとするは慢心して狂せるもの事、徐ろに省みて考ふれば、自ら知るの甚だ少きを悟らんや必せり。ソクラテスの人に説く、先づ之をして己れ自ら知る所なきを知らしむるの常なりしが、凡そ事を知るの博ければ博き丈け愈々知らざるの多きを認むるは、事實の掩ふべからざる者とす。——『宇宙』

○正義は擁護者を待つ

正義は擁

護者を待つ

俗に一押二金三男といひ、押と金とを男の上に置くが、其の謂ゆる男は容貌の美醜を意味すれど、又た幾許か性質に適用すべし。押し強きこと星亨の如くなるは、廉潔を以て愚とし、正義を以て弱者の聲とし、何の方面をも押し通りて顧みず。君子は之を觀て人衆き者の天に勝つを歎するのみ、反響あるも實際に何程の効果なし。馬哈墨の法を説くや、左手に經典を持ち右手に劍を抜けり。正義の士の敗るとは活人劍を知り殺人劍を知らざるに在り、不正の輩と同等に押し強くなば、之を仆すに於て何か有る。正義は女子と同じく擁護者を待つ。

——『日本及日本人』

○修身訓と處世訓

修身訓と處世訓と

人と力行

功利主義の是非は暫く措き、孔子の修身訓は多く處世訓ならずや。顔回の履と飢ゑしは處世の法を得ざりしに似たれど、孔子は不義にして富み且つ貴きを以て處世の法を得たりと爲さざりしならん。論語は修身訓たるに相違なきも、處世訓としても不可なし。其の理を説かずして肯綮に當り、言を費さずして趣味に富み、讀みて飽くを覺えざらしむるは、世態人情に吻合せるに由來せん。修身訓の妙味は最上の處世訓たるに存し、處世訓と没交渉なるは興味索然、人を感發するの力に乏し。——〔日本及日本人〕

模範的立德の價値

○模範的立德の價値

立德は人生の美點を綜合して考へし者、人生の完成を以て衆徳を具

佛陀基督を作れるもの

ふるに在りとし、暫く或る史的人物を藉りて之に充つるのみ。實際の人物なければ偶像を以て充て、或は偶像だも置かずに單に頭腦に宿らしむ。孔子なり、釋迦なり、耶穌なり、模範的立德家とせらるゝは、史實として價値少くなく、偶像的崇拜物として價値多し。

——〔日本及日本人〕

○佛陀基督を作れるもの

精神的レンズにて救世の光を凝集せるを佛陀と名づけ、基督と名づくる者にて、光は一切の衆生に在り、一切の衆生自ら佛陀基督を作れるなり。——〔日本及日本人〕

○快事としての立德

快事としての立德

帝王は一世の以て最上の尊貴とする所、而も其の帝王は孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の寺に跪けり。自ら三寶奴と稱せるあれば、ペテロの後繼者なる法王の靴に接吻せるあり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきを舉ぐれば、斯く帝王を跪かしむる立徳家なりとすべく、隨て志の大なる者の以て人生の最大快事とするは、之に彷彿たるに在るか、能く彼等立徳家の如くなるを得て果して愉快なるかは、頗る疑問の存する所なり、孔子は一生不遇なりしを以て決して愉快とすべからず、釋迦の生涯は不愉快ならずとも、特に愉快なりと覺えず。耶蘇に至りては、驢馬に乗りてエルサレムに入り込みし外、是れぞといふ愉快らしき事なく、短命にて死し、其死

理想的紳士

は悲惨目も當てられぬ状態なり。功名心の熾んなる者は、後世に於ける勢力の孔子釋迦耶蘇の如くなるを欲しつと、孔子釋迦耶蘇の如き生活を送るを欲せざるべし。——〔日本及日本人〕

○理想的紳士

聖人は紳士の最も到れる者にして、理想的紳士といふべし。聖は孔子が若聖與仁、則吾豈敢といひ、人の望んで得べからざる所の如くなれど、難きより解せば難く、易きより解せば易く、孔子も仁を以て聖と同じく企て及ばずと爲しつと、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣といひ、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何といへば、聖とて強ち人より遠からじ。獨園和尚は釋迦が現に兜率天に在りて勉強最中

なりと言へるが、其の意義に於て聖なるに際限なきも、紳士が性格行爲の向上する丈け聖域に近づく者と爲し得ざるに非ず。

—「日本及日本人」

國家と社會

懷疑と希望

○懷疑と希望

人として、國として、妄りに疑ふ者の運命は疑はし、希望あるを信する者は希望あり、愈々信じて愈々希望あり。 —「日本及日本人」

○外來思想と國民思想

細菌を驅除するよりも身體を堅固にするの效力多きが如く、外來の思想を憂ふるよりも國民の思想を健全にするに務むべし。

—「日本及日本人」

團體の爲に
する犠牲

○團體の爲にする犠牲

國家と社會

人は自ら理由を意識せずして團體の犠牲となるを甘ず。實に人は團體の犠牲と爲るの本能を備へ、將校や、兵卒や、出征を命ぜられて殺し得る限り敵を殺し、自らも敵に殺さるゝを辭せず。敵とする所は兵として募集せられたる良民、我は其の何郡の人たるを知らず、之と少しの怨恨なし、而して互に猛獸の如く相ひ喰み、唯だ噬み殺すの少きを憾むは、團體の爲めにするものにして、一旦平和となりて慶弔を一切にして親戚故友と異らざるは、亦た團體の爲めにするなり。忽ちにして敵、忽ちにして友、變化の急なる、寧ろ怪むべきが如きも、當人は少しも怪まず、孰れも己れの果すべき分を果せりと爲す。

——〔日本及日本人〕

最も國家
に憂ふべきもの

○最も國家に憂ふべきもの

最も國家に憂ふべきは、國民の政治に冷淡なるに在り、君主一人愛國者なりといふ専制時代なれば兎も角、國民總掛りにて國家を經營するといふ憲政時代に於て、肝腎の國民が政治に與かるを欲せずと在りては、憲政の實の擧がらざるは勿論、國家の獨立も覺束なしと謂ふべし。世界に各國の分立するは、人類が或る區域を限りて政治を念とするに基づく。我が祖先來の國家、我が關係する國家といふが、國家の爲めに努力し、義勇公に奉ずる所以なるに、政治は如何様にも可、英人が行ふも、露人が行ふも差支なしとせば、社會あるも、國家ある無し。印度の如き、既に然り。——〔日本及日本人〕

議員の不言實行は不可なり

○議員の不言實行は不可なり

行政官は或は不言實行にして可、員に議政府に備はりて、不言實行を念とするは、其の職責を忘れたるを咎めざるべからず。言は銀、黙は金とは、饒舌者流を戒むるに適するも、腹黒き者に口實を與ふる所あり。不言實行の甚だしき、盜賊に若くは無し、盜賊に義賊の名ある者あれど、支那の如き社會を除き、斷じて排斥すべきに非ずや。專制政府の功を立つる、立憲に優ることあるも、廣く立憲の必要の認められたるは、多くの場合、專制的權臣の民財を掠め、久くして愈々弊あるを以てなり。惡事千里を走れば、惡事を爲し難かるべく、議會の蛙鳴蟬噪、何の益なきが加くなれど、爲めに噂の世に傳はりて惡事の爲

政黨領袖と演說遣ひ

○政黨領袖と演說遣ひ

し難ければ、其れ丈け效用あるべし。況や院内院外に於ける言論は、一概に蛙鳴蟬噪を以て目すべからざるをや。——（『日本及日本人』）
演說遣ひの卑むべきは言ふ迄もなし、臯月の鯉の腸なく、唯だ翻翻として空に翻るに過ぎず、意と言と一致せず、言と行と一致せず、悲憤慷慨するも、滔々千萬言なるも、俳優の舞臺に於てするに類す。心ある者が大言壯語を厭ふは、腸なき演說遣ひに懲りての事なり。されど人をして演說遣ひの厭ふべきを覺えしむるは、一黨の領袖とし政見の責任を負ふ者が、自ら辯すべきを辯せず、演說遣をして事に當らしむるが爲めなり。領袖が自ら意見を發表し、説明を事とせば、謂ゆる

能言實行

演説遣なる者は漸次跡を潛むべし。——『日本及日本人』

○能言實行

嘗て桂内閣が不言實行を標榜せしは善し、不言不行若くは能言不行と同日の談ならず。されど憲政時代には能言實行の優れるに若かず。沈黙は金、能辯は銀なるも、世は金のみにて足らず、少くも補助貨として金よりも多く銀を使用するを要す。饒舌は厭ふべけれど、其の厭ふべきを以て言論を廢すべからず。之を廢すれば唯だ腕力と腕力と相ひ對し、劍と劍と相ひ對し、警察官とモップと相ひ對すべきのみ。

政務官の任

○政務官の任

——『日本及日本人』

言ひ得るもの

政務官たる者は、唯だ任用令の除外例を以て居らず、宜しく憲政治下の政治家を以て居るべし。議場に於て自ら意見を發表し、反對者の惑を解くに務め、開會中にも、餘暇あれば院外に演説し、説明若くは解惑に従事すべし。閉會後に部署を定め、各地に出張して政府の方針を説明すべし。二千數百年前、孔子が教へずして罰するを戒めしに、今日何等説明する所なく、唯だ人民が誤解すといひ、理解せずといひ、専ら警察官を以て取締り、動もすれば軍隊を動かすは、誠に恥づべき次第ならずや。——『日本及日本人』

○言ひ得る言はざるもの

實行に長じて全く言ふこと能はざる者は、言ふこと能はざるを以て

棄つべからざるも、斯かるは數に於て甚だ少し。從來政務官たる者は、座談に長じ、能辯とし稱すべきに、務めて演壇に立つを避くるは、言論の爲めに不慮の禍を招くを恐るゝに因る。憲政の下に斯かる恐怖心を懐くは、戰場に出で、股票するに同じ、斷じて破らざるべからず。彼等は屢々人民の政治に冷淡なるを言ひ、其の政治思想の幼稚なるを言ひ、其の憲政に慣れざるを言ひ、歎息の聲を發するが、事の此の如くなるは彼等自らの責ならずや。——〔日本及日本人〕

黨首と得要領

○黨首と得要領

嘗て黨首は輪廓の漠然たる者なるかに考へられしに、今は原氏といひ、犬養氏といひ、加藤男といひ、皆輪廓の狭く限られたる者なり。是

輿論と爲政家

れ政界に不得要領なる者無きが爲ならず、不得要領にして力ある者無きが爲なり。不得要領にして力無きは、得要領の簡便なるに若かず。有力なる不得要領漢は今暫く種切の状態なり。——〔日本及日本人〕

○輿論と爲政家

立憲政治は輿論を重んじ、之に従ふは事の當然なるが如くなれど、多數が知識の程度の低きと共に、所謂輿論の愚論たることあり。愚論なりとて、爲政家は之を利用するの道知らざるべからざれど、單に従ふのみにては、男子の眞骨頭を備ふる者ならず。輿論に従ふは、當然よりも寧ろ己むを得ざるに出で、得べくんば之を指導して誤る所なからしむべし。輿論に従ひさへせば善しとし、愚論に従ひ、之に唱和

非を改めざるもの

するは御用學者の曲學と殆ど擇ぶ所無し。——『日本及日本人』

○非を改めざるもの

智は以て諫を拒ぐに足り、言は以て非を飾るに足るとは、獨り殷紂ならず、二三子に限るよりは世間普通の状態と認むべく、實に人は自身に對する批難を抵排するの智辯を要するが、之を許容するは是非得失の未だ判明せざる間の事、其の判明して尙ほ改むるを肯んぜざるは、自ら信するの篤きに非ず、小辱を恐れて大辱を忘れ、害惡の他に波及するを察せざるに出づ。利害の爲に變説改論するの甚だ卑むべきと共に、見識を銜はんとて非を遂げ過を重ぬるの同じく卑むべきを覺ゆ。私人に在りても卑むべく、國務を處して此類の事ある、其非や重し。

須臾の繁昌

○須臾の繁昌

——『日本及日本人』

小なる者は早く進化し始めて、早く進化し畢る、地球は木星土星に比して甚だ小なり、隨て渠れ二星が渾沌たる有様なるに拘はらず、我は市邑に家居し、淵に釣して樂むなり。月は地球に較べて更に小なり、而して生物の滅盡せること久しき以前に在り。我が日本の外邦の刺戟を受けて長足の進歩を致せる、奇とするに足らず、内に蓄藏せる所片端より放出す、金はよし、石炭はよし、何でも彼でも目つかる次第は放出し、汽車がある、汽船がある、電氣燈があるといふ、實に進歩は造作なきことなり、而も多くもあらぬ石炭を以て、廉價の競争に勝ち

て、須臾の繁昌を喜ぶの類は從業者の手前は兎も角、餘り深か頼みすべきことにあらず、宵越しの金を遣はぬは個人としては愉快なり、國家としては面白からず、何分慾張り連は、己れの懐中をしめる割合に國の財富を忽にし過ぎる傾向あり。——『小泡十種』

偽忠

○偽忠

教育勅語を拜し、教育勅語を誦し、而して更に阿諛するを専務とする者あり、神経家を脅迫して利を貪らんとするものあり、兒童に教科書を買はさして萬千を獲んとするものあり。此の徒輩の忠は鼠に勝ること僅々。偽忠の厭忌せらるゝは、將門尊氏の同情を表せらるゝ因由なり。——『小泡十種』

國政に冷淡なる現代青年

○國政に冷淡なる現代青年

青年は意氣最も壯んにして、最も政治熱に浮かれ、政治より遠ざかるの困難なるべきに、自ら之より遠ざかり、生活難就職難を訴へずんば、耽溺に浮身を窶し、或は俳優の末輩と爲り、政治論を聴かされ、兩手に耳を掩ひ擧蹙して遁れ去るとは何事ぞ。而して口癖に言ふ、時代は變ぜり、世は個人主義と爲れり、個人の自覺が肝要なり、如何に囚はれざる生活を送るかど問題なりと。斯かるは皆な不可なし、而も如何にして能く然るを得るか、天下に濶歩するの意氣なくして個人とし自覺し囚はれざる生活を送らんなど、思はざるも甚だしからずや。故さら囚はるゝかの如く、身動きの出來ざるまで束縛され居らずや。

阿官と阿民

○阿官と阿民

——『日本及日本人』

曲學阿世の語あるよりして、官の爲めにする者は、自ら世に逆ふとも少しも世に阿らず、何の邊に阿世の實あるかといひ、民の爲めにする者は、阿世を以て立身出世に都合好くする事とし、官に在りて忠義振り忠義立てするを嘲笑するが、一の世字の解釋を争へば際限なし、之を阿官と阿民とに別ち其の孰れなるかを考ふるの便利ならずや。阿官と見えて答むべきあり、答むべからざるあり、阿民と見えて、答むべきあり、答むべからざるあり、孰れに於ても、答むべきは自ら戒むべし。常に免るべき所以を考へ、苟も免るよを得て安んずる者は、向

顯官先づ粉骨齋身

上せずして唯だ向下するのみ。——『日本及日本人』

○顯官先づ粉骨齋身せよ

人民は増税されて喰へなく爲りはしない、場合によりては政府案よりも遙に多く負擔に堪ふるのだ、しかし是れは事情に依ることだ。平生十貫目を重しとする者も火事の折り二十貫目の物を輕るふくと擔ぎ出すではないか。そこで人民はどういふとき苦痛を忍ぶかといふに、上流者が身を挺して國家の爲めに起ち國家の爲めに財を抛つを見るの時である。元老は割合に財産を持つてをるが、國家の爲めに其の幾分を投じ、銳意奔走するならば、天下の人士靡然として之に従ひ、又た區區の税目を争ひはせぬ。世界の事を聞見するは顯官に若くはないに、

其の顯官は紳商の別荘で贅澤三昧してふざけて居る、之を聞き慣れると如何ほど形勢の切迫を報じても、愈よといふ覺悟が出来ぬ、火事の際巡査が鼻歌詠つてゐては人の働きが減するだらう、況して國事は火事の如く目の前に見えねば國政に與る者に於て猛進して粉骨齋身せねば、日夜營業に従事する者はなく、國家の急を感ずるに至らぬ、これは決して無理ではない、さうあるべきである。——『小池十種』

○國家の爲か、勢利の爲か

政府の鞏固にして各大官の地位に安んずる時、官の爲めに説くは、たとへ其の説く所の正當なるにせよ、屋上屋を架する者にして、せずもがなの事なり。而も大厦の覆へらんとして一木の支ふべからざる時、

國家の爲か、勢利の爲か

薩の内閣と長の内閣

無政府に陥るの大なる禍患なるを思ひ、務めて政府を鞏固にせんとするは、大に賞讃すべし、一を以て律すべからざるも、唯だ亂世の少く、治世の多く、官に阿るは民に阿るよりも勢利を得るの確實なるが故に、國家の爲めにして勢利の爲めにすと見做さるよも辯解に自由ならず。

——『日本及日本人』

○薩の内閣と長の内閣

長内閣は長きは四年八ヶ月、短きは六ヶ月、甚だしきは二ヶ月、薩内閣は一年六ヶ月より一年二ヶ月の間に在り。即ち長短の極端なると長短の平均せるとあり。斯かるは偶然の事なれど、長が勢に従ひ、勢の可なれば久しく續き、勢の不可なれば忽ち倒れ、薩が同じく勢

に從ひつゝ、勇を銜て物議を醸し、挫折を餘儀なくせらるゝと相ひ應ず。第三柱内閣の二ヶ月なるは餘りに短く、薩人ならば抵抗して今少しく期間を延長したるべきが、長人は勢の窮せるを察し、強て抵抗するを無用の業とし、未だ大に傷つかざる前に去らんとす。大に傷つかざれば再舉の機會を捉へ易く、長が次第に權力を占め、薩を壓伏せしは、此の進むに早く退くに早き弾力性に因ること多し。薩が勢の不可を知りて尙ほ頑守せるは、勇氣の多とすべきも、非を飾るが爲めに滿身の勇氣を振ふは暴虎馮河と擇ばず、寧ろ更に劣れりとす。大義の守るべきを守りてこそ勇氣の貴ぶべけれ、無差別の勇氣は頗る危険なり。長内閣と薩内閣と、此邊に長短あり、而して特に瓦解の際に顯は

る。――(日本及日本人)

○忠君愛國の名に於て利益を得たるもの、

得ざるもの

忠君愛國の名に於て利益を得たるもの、
得たるもの、
得ざるもの

忠君愛國の名に於て利益を得ながら、利益を得ざる者が己れと同様の思想ならざるを怪み、民心を作興し、忠愛の情を涵養せんとするは、聊か心すべき事なり。彼等が自ら以て忠愛なりとするは、眞に其の情に富めるなるか、將た其の情を表はすべき業務に與かれるなるか。彼等自ら其の情に富めば、何を以て一般人民の之に富まざるを知るか。一般人民の薄くして彼等獨り厚かるべきの理あるか。彼等は政府に關係する限り、國家の事業に與かり、政府を離れて全く忘れたるが如き

に従ひつゝ、勇を銜て物議を醸し、挫折を餘儀なくせらるゝと相ひ應ず。第三柱内閣の二ヶ月なるは餘りに短く、薩人ならば抵抗して今少しく期間を延長したるべきが、長人は勢の窮せるを察し、強て抵抗するを無用の業とし、未だ大に傷つかざる前に去らんとす。大に傷つかざれば再舉の機會を捉へ易く、長が次第に權力を占め、薩を壓伏せしは、此の進むに早く退くに早き弾力性に因ること多し。薩が勢の不可を知りて尙ほ頑守せるは、勇氣の多とすべきも、非を飾るが爲めに滿身の勇氣を振ふは暴虎馮河と擇ばず、寧ろ更に劣れりとす。大義の守るべきを守りてこそ勇氣の貴ぶべけれ、無差別の勇氣は頗る危険なり。長内閣と薩内閣と、此邊に長短あり、而して特に瓦解の際に顯は

る。——〔日本及日本人〕

○忠君愛國の名に於て利益を得たるもの、

得ざるもの

忠君愛國の名に於て利益を得たるもの、
 忠君愛國の名に於て利益を得ざるもの

忠君愛國の名に於て利益を得ながら、利益を得ざる者が己れと同様の思想ならざるを怪み、民心を作興し、忠愛の情を涵養せんとするは、聊か心すべき事なり。彼等が自ら以て忠愛なりとするは、眞に其の情に富めるなるか、將た其の情を表はすべき業務に與かれるなるか。彼等自ら其の情に富めば、何を以て一般人民の之に富まざるを知るか。一般人民の薄くして彼等獨り厚かるべきの理あるか。彼等は政府に關係する限り、國家の事業に與かり、政府を離れて全く忘れたるが如き

跡なきか。前大臣にして一年に三ヶ月間貴族院に出席し、而して、平素恩給及び其他に樂隠居する外、何事をも爲さざるあるは何ぞ。次官及び局長の官を罷めて何處に何事を爲しつつあるやの知るべからざるあるは何ぞ。忠愛の情は心に在り、外に表はすを要せずとせば、謂ゆる人民なる者の忠愛の情に薄きを判定すべからざるに非ずや。昔は野に遺賢なきを期し、有能者を政府に集めしに、尙ほ常に遺賢の絶えずして、今は社會の複雑を加へ、政府以外に種々の機關の備はり、遺賢を網羅せんとするも得ず、網羅せらるるを欲せざる者も多く、隨て官吏者流の如くならずして君國に益し、或は幾層か多く益せるあり、而して爵位祿利を得たる者が然らざる者を目して忠愛の情を缺けるかに

休暇の效力

取扱ふは、頗る奇異なる状態ならずとせず。——『日本及日本人』

○休暇の效力

執務の效果よりし、午前は金、午後は銀といふ諺あり。熟睡より覺め、水浴し、五體を伸ばせば、天地我と一新し、讀みて解せざる無く、考へて通ぜざる無きに似たり。其の一時間に成す所は、心倦み身疲れて従事する所の十時間より効あり。此と同じく、長き休暇にて疲勞を癒し、新銳の氣力を以て事に當れば、山路の崎嶇も坦々砥の如し。警むべきは疲勞よ、駿も疲れて驚に劣る。宜しく疲勞より回復するに務め、事に當りて爽快を感じ、新鮮を感じ、フレッシュを感すべし。休暇を過ぎて依然元氣を缺き、職務を怠るは、老朽ならずんば若朽。

武臣の愛國心を疑ふ

○武臣の愛國心を疑ふ

二十七八年役及び三十七八年役は、國家の位置を高めしや大、之が爲めに努力せしは、一旦緩急ありて義勇公に奉ぜん者、其の愛國的行動の顯著なるを認む。されど軍人は前に賞あり、後に罰あり、賞の爲めに出征せんとし、罰の爲めに出征せざるべからず。階級の嚴にして、上の命は下に行はれ、恰も運轉手の器械に於けるが如し。戰場は下なるほど危険、將官よりも佐官は危険、尉官は一層危険、兵卒は最も危険、眞に水杯して別かるべきは兵卒なり。上の命する儘に下は行ひ、進めといへば進み、突貫せよといへば突貫せざるべからず。突貫して

一隊全滅せし者の少からず。斯くて多く兵卒を失ひ、尉官を失ひ、而して功は佐官に歸し、佐官の功は將官に歸す、將官は戰略戰術に苦心慘澹し、其の巧拙にて勝敗の別かるれど、苦心慘澹は獨り軍事に限らず、何事も肝要なる場合に苦心慘澹たるを要す。一たび計畫を誤れば、或は大敗を招くべきも、總司令部が危きに陥るは殆ど萬に一も無き事にして、總司令部及び各軍の司令部は、單に生命の點に於て安全なりとすべし。全局に於て略ぼ勝算の歴々たる限り、上官は生命を賭するよりは、勳功を賞せらるゝの希望あり。義勇公に奉ずるとて、死生の巷に奔走するは下官及び兵卒にして、上官は概ね凱旋して賞を受くる者なること、下官及び兵卒も漸く之を知る。海軍にては、危険

の度に於て、特別に將卒の差なきも、陸軍は其の懸隔甚だ著るし。將軍も敢て死を畏れず、必要に臨んで死地を踏むも、さる必要の少く、功名に渴する者は頻りに開戦を待つ。其の功を立つるは政治家の功を立つるに異ならず。世間にて將軍を歓迎し、無比の愛國家の如くするは、其の死地を踏めるを察しての事にして、他に死するより重大なる事あれど、そは多く問ふ所に非ず、事の輕重よりせば或は文官中に一層重んずべき者あり。將軍に服するは其の死を冒かしよ事なるに、實際死を冒さざりしとありては、胸間に勳章の燦爛たるは、果して爵位祿利の爲めの愛國なるを疑はれざるべきか。——〔日本及日本人〕

日本に於ける憲政の實

○日本に於ける憲政の實

憲政が果して最上の政治なるか、蛙鳴蟬噪、畢竟何の益あるか、專制よりも政務の舉がらざる跡なきか、種々の疑問の出で、孰れも熟慮を要すれど、如何に疑ふとも、現に憲政治下に立つ以上、憲政らしく行動するを望まざるべからず、中にも、一に多數の意志を重んずること、二に各々意見を發表し、最良なる者を探るを志ざすことを要す。此の二者は既に幾許か行はれたりと見ゆるも、事實に於て殆ど全く言ふに足らず。稍と事實上に認むべきは衆議院の頭数を重んずることにして、其の頭数は盲目的費啞的なり。——〔日本及日本人〕

○政黨に陣笠たるの責

奈破崙の軍隊が歐洲に冠絶せしは他に非ず、兵卒より大將を出だし

政黨に陣笠たるの責

得るほど、兵卒に精銳なるありしなり。規則にて破格の昇進を禁ずれば兎も角、然らざる限り、今日の兵卒、明日の將校、幾もなく大將と爲るが如き勢なくては、全洲を蹂躪するに堪へず。政黨は一も陣笠の昇進を禁ずるの明文を設けず。首領も之を明言せず、領袖も之を明言せず、党内黨外、何人も之を明言せず、強ひて禁ずる者ありとせば、唯だ陣笠自らなり。能力を發揮すれば、其れ相應に昇進し得べき路の開かれつゝ、唯だ能力を發揮せざるが爲めに陣笠たるに止まらんには、責の歸する所知るべきに非らずや。——〔日本及日本人〕

○政治と國民の公共心

政治は國民の公共心を測定するに便利なる者にして、政治に冷淡な

政治と國民の公共心

るは、他に何の稱すべきあるにせよ、遂に強國を形づくる能はず、蒸氣力の猛烈なるは、安全瓣にて如何様にもすべし、其の少きに過ぎんか船は洋中に漂ふのみ。——〔日本及日本人〕

○政治に冷淡なる藝術家

俳優が嘗て河原乞食として賤められしは、君臣の義なく、唯だ藝を賣りて旅せしが爲めにして、其の位置の高まれるは、種々の事情あるにせよ、廢藩置縣にて君臣の關係の消滅し、國家の元首の下に平等と爲れるに由來するあり、必ずしも藝術の價値の認められたるに非ず。今日藝術家の政治に冷淡なるは、河原乞食の藩政に冷淡なりしに類するが、事の此の如くなるは、藝術趣味ある者の政治趣味に乏しく、政

政治に冷淡なる藝術家

治的變動を聞見して何の興味を感じざるに因らずとせず。

——『日本及日本人』

弊害の卸賣と小賣

劇しく動けば、汗の流れ、塵を被むるが、靜にするも身に垢塵なきを得ず。變時に拔本塞源を敢てすべきは勿論、平時に弊習を改め自ら新たにするに務むべし、變時は弊害の卸賣、平時は弊害の小賣、小賣も積みて積弊と爲る。——『日本及日本人』

○在朝以外に忠君愛國者なき乎

在朝以外に忠君愛國者なき乎

爵位の高くして心術の陋劣なる者あると共に、逆賊と呼ばれて心術の高潔なるあり。人は榮辱の何に由來するやを疑はざる能はず。西郷

隆盛以下多くの薩摩隼人が戰場若くは刑場に死せしが皆な忠愛の情の胸に溢るゝ者にして、知識の足らず、才幹の足らずとも、一人の非忠君非愛國なる無し。西郷の家族は戦時に世を避け、茅屋に天子の寫眞を奉じ、恭敬至らざる無かりき。逆賊は斯くして日を送り、天子に咫尺する高官は却て謹慎を缺き、勝てば官軍、負くれば賊、大義名分は力を以て決すると知られぬ。謹慎を缺きし高官は汲々として忠君愛國の名を汚さざらんとし、苟も己れに異なるを指して非君非愛國とし、法律を以て之を窘迫するに、西郷は天地容れざるの逆賊と呼ばれて憂ふる所なく、従容として死に就けり。眞に人事を盡くして天命を待ち、天命の至りて死せし者にして、人事を盡さずして盡くせるかに

粧ふに比し、雲泥の差なりと謂ふべし。御大喪の節、村落に日夜香を焼いて念佛せしあり、高位高官にして賣女と戯れしあり。彼の官吏の不謹慎なるは、表面を謹慎にせば可なりとする者、一旦勢の變じて如何なる態度に出でんも測られず。愛國的行爲も、果して軍人外交官等の如くならざるべからざるか。商業を以て、工業を以て、農業を以て、學術を以て、藝術を以て此れよりも國家に利益を與ふるあらざるか。直接に事業を経営し、間接に事業を助成して國家に利益を與ふるあらざるか。——（『日本及日本人』）

上位者と國家の急

○上位者と國家の急

上に位する者が一番先に國家の急を感すべきは猶ほ高山が一番先

に日光を受くると同じわけだ、ところが、上に位する者が平氣で贅澤してふざけて居る、人が國家の急を聞かされて未だだらうと思ふのも無理はなからう。——（『小泡十種』）

○天蘇羅文明

天閣征明の目的至て明白なり朝鮮を略し明國を席卷せんと欲しよのみ、會て信長に告ぐるに此意を以てし、後ち鎌倉に遊び、賴朝の塑像を觀るに及び、又た之に告ぐるに此意を以てし、外征の檄を傳ふる、亦た此意の外に出でざりき。朝鮮王に答へし書に云ふ、余山海の遠を憚らず、將に一躍明に入り、我朝の風俗を四百餘州に移し、我皇の政治を億萬斯年に施さんとすと、目的や瞭然として明白なりしと謂ふべ

明天蘇羅文

し。廿七八年役の目的亦た明白なりしものゝ如し、されど爾かく落々として天真を流露するを得ず、表面と裏面と時に齟齬する所無かりしにあらず、文武の人士清を攻むるの已むべからざるを言ひしも、今に於て其の已むべからざるは果して何事なりしかを考へよ、考へ去り考へ來れば、世界は天麩羅文明ならずや。——『小池十種』

○黨員名簿よりも同情

國民の多數は平凡なるも、平凡なるは判断に於て往々奇抜なる者に優る。今日何の政黨に最も同情多きか。名簿を計算すれば、何黨は黨員幾名と知らるよも、名簿を以てせず、同情を以てせば、黨員の多寡と著るしき差違なかるべきや。今の政黨は名簿上の黨員を數へ、同情

黨員名簿
よりも同
情

上の黨員を數へず。政黨の起りてより歳を経ること多からず、同情の效力の甚だ薄きも、其の效力の漸く増加すると共に、政黨の體面の一變するを見ん。國民は國政を念とすべき者にして、成るべく政黨に關係するの望ましかれど、政黨に關係するとは必ずしも名簿を差出だすを言はず、自由に批判し、善きを善しとして賛成し、惡しきを惡しよとして反對するをも言ふ。各政黨の將來は、名簿よりも名簿以外にて決せん。——『日本及日本人』

境遇と職
分

○境遇と職分

文明の現狀にて續き、列國の現狀にて對峙する限り、軍備擴張と財政整理との關係は、頗る人の心を惱まし、能く之を調和するを以て爲

政治家の手腕とすべきが、絶えず雑多の思潮の來往し、雑多の要素の混淆し、昨年を以て今年を律し難し、今年を以て明年を律し難く、事に臨んで果斷勇決を必要とするも、妄りに騎虎の勢に驅られ、徒らに我見を貫いて自ら快くするを戒むべし。騎虎の勢とは、自らの力なきを示すに過ぎず。力の充分なれば、虎を馭するに於て何かあるべき。輔弼の臣として自家の境遇の爲めに國家に於ける職分を忘るゝより誤るの甚だしき無し。——『日本及日本人』

○國威發揚對憲政整備

相ひ容るべくして互に撞著するは、國威發揚對憲政整備にして、國威發揚は概ね軍備擴張を伴ひ、延て集權に加ふるに租稅増徴を以てし、

國威發揚對憲政整備

憲政整備は概ね人權保護を伴ひ、延て分權に加ふるに民力休養を以てし、増稅減稅の争ひに終らんとす。何事も程度問題にして、或る程度以内に稱揚すべく、其れ以外に弊害の現はるゝが、國威及び憲政の關係は其の最も著しき者と謂ふべく、實に或る程度まで二者相ひ待ち、輔車唇齒の狀なると共に、或る程度を超えては、間上極端に反撥するに及ぶ。事は大なるも、關係は微妙、笑ふと怒ると一髮を界にす。

——『日本及日本人』

○斯くの如く政黨を見よ

蓼喰ふ蟲も好き好きとは何事にも免れず、或は糞桶に蠢動する蟲もあり、之に向つて何事を尋ぬるも、能く理解すべき返答を得ず。或

斯くの如く政黨を見よ

る事情に餘儀なくされたる者は餘儀なき事情ありとして恕し、さる事情に餘儀なくされざる者は、主義綱領よりも幹部員の何人なるか、重要な問題を如何に取扱へるかを察すべし。國家の名に於て私榮を計らざるか、國民の負擔を増して私利を營まざるか。口は重寶の譬に漏れず、何の幹部員も尤もらしき事を述ぶるが、其の平生を考ふれば、彼れ焉んぞ度さんや、看板に偽り多きは政黨の習ひ、看板を見ず、販賣の實物を見よ。——『日本及日本人』

○軍備と國際

力は權利なりとは國際上に否定すべからず。狼は羊に向つて曰ふ、汝は何故に吾水を濁らすと。羊は曰ふ、小生は下流に在り、何ぞ貴下の

水を濁さんと。狼は羊の辯解を小癩とし、飛び蒐りて之を喰ひ殺せり。列國の斯かる状態なるは事の明々白々なる者にして、力あれば何事も成すべく、力なくば奈何ともするを得ざることを、愈よ事實に徴し愈よ信すべきを認む、競争國の軍備擴張を觀、己れ擴張を敢てせずんば其の壓迫を免れず。擴張の極、國家は破産すべきも、破産と亡國と孰れを擇ぶべきか、均しく存在を難んぜば、寧る乾坤一擲、敵國を突破すべしと考ふ。——『日本及日本人』

○『吾輩政治家』

政治家の範圍は何處より何處までなるか、代議士が頻りに『吾輩政治家』といふは英譯してホリチシアンなるか、ステーツマンなるか、

前者ならば差支なく、後者ならば不遜に過ぎざるか。ポリチシアンが勢利を貪り國政を慮らざるが爲め、次第に悪意に解され、ポットハウス・ポリチシアン（銘酒屋政治家）と差別なきに至れるも、ステーツマンは政治的技倆の秀でたるを認められての事にして、自ら斯く名乗るは自ら政治的技倆に秀でたるを公言するに同じく、自惚れも甚だし。たとへ眞に技倆に秀づるとも、自ら名乗るに憚るべき筈、木葉議員がウイ・ステーツマンと言ひ出でよは、聽く者笑ひを禁ずるを得じ。

——『日本及日本人』

若朽官吏
に對する
刺戟

○若朽官吏に對する刺戟

日本人が歐米人に較べて、精力の如何なるやは、屢々問題と爲り、労働者の如き、我は彼の三分二に過ぎずとの説あるが、労働者は精力の足らざるも、器用にして彼の爲し得ざる所を爲して償ふべし。紳士の階級に就て頗る知り難きも、我が官吏の彼に及ばずと見るべきは、同數の人を以て同數の事務を執らざるの外、省廳を退いて家に歸り、自ら修養するに務めざる事なり。人と事務との割合の精はしく取調べられたる無きも、我より多くの人を使用するは何國なるや、隆盛なる國にて我より繁文褥禮を事とするあるや。假りに事務に必要なる丈けの人ありとし、其人の家に歸りて疲勞せる形あるは、事務繁劇の爲めなるか、又は別に事情あるか。一概に言ひ難きも、書を讀むは大學卒業を終りとし、爾後年々知識の固定し、老朽せずして早くも若朽するの

傾向なきや。是れ我が日本人の精力の足らざるの致す所なるかといふに、從來讀書に疎かりし銀行會社員の却て讀書の嗜好を増し、新刊書の擴まるの、官吏の間に甚だ少く、他の階級に多きを以て否定すべきに非ずや。十五年勤續して恩給を得るは官吏に相當せる事とすべきも、若朽者の多きは、然らざる者の多きに若かず。若し眞に若朽者なれば致し方なきが、一種の惡風の人を若朽ならしむる嫌なしとせず、即ち省廳に在りては、早く老成ぶらざる能はざるが上、執務に快活を感じせず、爲すべき事なきも執務時間を過すのみにて疲勞し、歸りて休息し、或は酒色の間に快を買はんとす。今の文官登庸規則及び分限令は餘りに窮屈にして、官吏を籠中に飼殺しにする形あれば、或る制限

の下に無試験者を容れ、適任者を得ると共に、若朽者に刺戟を與へ、皆な各々奮勵して事務を執るが如くすべし、今は官吏ならずして、某某局長より敏活に事務を執り得るは、幾人をも指名するに難からず。試験を経たりし丈、平均して官吏は他の階級より知識あれど、手腕に於て特に稱すべきを見ず、今の儘に過ぐれば、政府は知識ある鈍物の集合場と爲るべき恐れあり。——『日本及日本人』

○思想の類唐を匡濟する便法

國民思想の類唐し、忠君愛國を滑稽視せんとするを匡救するには、青年をして政治に興味を覺えしむると、元老をして私財を以て公共事業に参加せしむるとより便法なるは無し。——『日本及日本人』

○大臣の言行と悪影響

群衆の多くは健忘性にして、特別の人の特別の言行に注意せず、其場限りの痛快事を聞いて満足す。矛盾を氣遣ひ、左顧右盼するよりは、其場に人の悦ぶが如きを言ひ且つ行ふが群衆を支配するに適し、此點に於て隈伯及び尾崎氏は天性群衆心理に通曉せりとすべし。共に其場限りの事を放言し、今日は今日、明日は明日、意見に拘泥するを以て愚人の事と信するが如し。其場を痛快にするは、言論を武器とする政治家に缺き難く、原氏の如く揚げ足を取らるゝを恐るゝは、多數政治の秘訣を解せずとすべきが、其場限りの言ひ草も或る程度に於てすべく、國家の大事に關するは、群衆が全く忘却し居るとも、斷じて掌を

覆へすが如くすべからず。多數こそ健忘性なれ、稍よ力あるは斯く不注意ならず、幾許か公人の言論を記憶す。群衆の動くは此等比較的力量ある者を媒介としてにて、若し著名なる政治家が野に在ると朝に在るとにて意見を二三にし、言論を玩弄するの明かならんには、或る者は怒り、或る者は黙し、或る者は英雄人を欺くの膽力及び才幹を歎美し、事大主義者流の多き丈、大臣の言行に重きを置き其の言語の末に拘らざるを稱し、機を觀て轉變するを當然とし、何時となく自ら責任を輕んじ、之を重んずるを愚直の致す所と考ふ。斯くて人に接するや力の劣れる者は之に化し、何事も其場限りにて可なりとするに至る。固より社會の甚だしく腐敗せざる間、何等かの制裁あり、無責任なる徒

に倣つて無責任ならんとするも、絶対に無責任なるを得ず、多少責任を顧慮するの常なれど、一層多く責任を重んずべくして然らざるを奈何せん。其場限りに事を成すに傾くは、社會の爲めに慶賀すべき事ならず。英雄色を好むとて徒らに色を好み、英雄人を欺くとて徒らに人を欺けば、其の弊や少からず。隈伯及び尾崎氏は、他の能力を以て無責任の行爲を補ひ得るも、之を模倣して全く責任を解せざる者の多きを加ふるは、「嘘は日本の寶」といふ鄙諺を事實にするの恐れあり。

美名の下に利を計るもの

○美名の下に利を計るもの

—『日本及日本人』—

善知識と惡僧との差違は、主として佛の名に於て利を計ると否とに

在り。殊勝氣に珠數を爪繰りて老翁老嫗の懷中を絞るは、佛の尊嚴を傷つくること少からず、基督教に神の名を濫用するを一の罪惡とす。何の代にも、何の國にも、美名あれば必ず之を濫用し、以て利達を計るあり、忠君愛國の名の下に利達を計るあれば、自由民權の名の下に利達を計るあり。ローランド夫人が自由の像を仰ぎ、自由よ、如何に彼等は汝の名を弄ぶよと言へりし時、人は各々自由民權を利達の手段とせり。美名の下に利達を計るを得ば、人は其の美名を唱へざる無し。忠國愛國を唱へて利達を計るを得ば、誰か忠君愛國を唱へざる。自由民權を唱へて利達を計るを得ば、誰か自由民權を唱へざる、唱へて利達を計るを得んか、唯だ唱ふるの易きを見て其の難きを見ず、楠正成

が忠君の模範たるは、單に勤王の師を起しよが爲めならず、己れの信ずる所を貫き、七生して志を達せんとせしに在り。承久以來、天下北條あるを知りて朝廷あるを知らず、北條に忠勤する者は賞せられ、之に忌まるゝ者は刑せらる。正成が刑賞を度外に措き、小軍を提げて起りしは、聞く者の皆な以て無謀の舉とせし所、然るに偶々勢の變じ、所在の豪傑並び起り、遂に北條を滅せり。北條に代りて權勢を占むるは足利、之と共にすれば富貴を得、之と共にせざれば沈淪を免れず。而も正成は之と共にせず、營に己れ自ら死を決して死せしのみならず、尙ほ遺族を戒め、王家に忠勤すべきを言ひ、全く利達の外に超し出せり。若し朝廷の盛んなる時、其の權勢を増大して高位高官を得ば、

事は不勤王ならざるも、毫も楠公の楠公たる所無し。

—(日本及日本人)—

○官吏の職分に専らならざるもの

官吏に比較的職務を專一とする者ある傍、之を專一とせず何がな己れの利益若くは愉快もがたと考ふるの少からざるが後者は大略二種に別つ、一は有力者と關係あり、或は事務を處して餘力あり、依りて若干の官職を兼ねる者、一は規定通り若くは習慣通りに執務し、餘暇を以て内職し又は娛樂に耽る者なり。人に依り一事に専らなるを得ず、八百屋的なるを長所とするあれど、多數を平均すれば、各自全力を一事に注ぐに若くは無し。若し或る職務に全力を注ぎ、而して力の餘れば、

官吏の職
分に専ら
ならざる
もの

昇進させて更に困難なる職務に當らすべし。孔子が牛羊遂ぐるのみ、會計當るのみと言ひしは、史實の疑はしきも當に有り得べき事にして、其職に在れば其事に専らならざるべからず。然るに昇進せしめ難き事情あるにや、將た昇進せしむるも、俸給の増額の少きにや、他の有利なる職を兼ねしむる事の行はる。元と普通の事務はさまで難からず、一と通り處理し置けば不都合の認められざるが故に、兼職を以て能力に對するの報酬とするを得んが、如何なる職務も、充分を期するには、全力を出だして猶ほ足らざるを覺ゆべし。能く牧畜するは容易ならず、能く會計を處するは容易ならず。若し眞に力の餘り、瑣細の事に齷齪たるは牛刀を以て雞を割くに類すとせば、宜しく轉職を請ふべく、聽

かれずんば辭職すべし。職務を執りつと、心之に専らならず、他の職務を兼ね剩へ三四又は五六を兼ねるは、自らの職分の何に在りとするか。單に官吏たるにて足るといふは、職分を解する者ならず、自ら如何なる官吏たるかを知悉せざるべからず。既に或る職務に就ける以上、極めて輕微なる職務を兼ねるは可なるも、本職と同様なる職務を兼ねるに至りては、己れの一個體たるを失ふに均し、國として二三分せるが如し。されど兼職多き徒は、概して無能ならず、兼職の總てを果すの能力なきも、普通に有能の士とし目すべきが、此等の外、定刻に出で、或は定刻より後れて出で、例に依りて書類を開き、例に依りて暫く放棄し、例に依りて印を捺し、或は上官に伺ひ、或は屬官を呼付

け、次で宅に歸り、謠曲の稽古し、或は碁を圍みて眠に就く。時として宅調べといふあれど、眞に職務に勉むれば、一週間の事を二三日に能くすべく、敏腕なるは一日に能くすべし、唯だ職務に専らならざるが爲め、事務の澁滞するのみ。——『日本及日本人』

危険思想と孰れぞ

○危険思想と孰れぞ

先年政府が撲滅に務めし危険思想は、危険なるに相違なきも金錢の爲めにせしに非ず。忠義顔して不忠を事とし、愛國顔して賣國を事とするに孰れぞ。——『日本及日本人』

獨逸と限閣

○獨逸と限閣

獨逸が必要の前に法律なしといふ諺を極端に使用するが如く、限閣

は必要の前に責任なしといふを何處迄も適用するを辭せず。

——『日本及日本人』

○變説改論よりも瘦我慢

嘗て渡邊子が議場にて答辯する中、「彼も一時此も一時」の語あり。此の語や孟子に出で、之を引用せしは當意即妙とすべきに、無責任を意味するの語として傳はり、人の變説改論する毎に彼も一時此も一時といふの習はしと爲れり。凡そ人の易きに就くは水の低きに就くが如く、若し變説改論自由勝手にして、昨日言へりし所今日變説し、今日言ふ所明日改論し、右に是認し、左に否認するを得ば、便利此上も無けれど、斯くて大手を振りて通過し得るの社會は浮薄を極むる者、浮薄な

變説改論よりも瘦我慢

る社會は國家として列強と競ふに堪へず。列強競争の間に立つには、國民各自の剛健にして、利害の爲に變説改論するよりも、瘦せ我慢を押し通ほし、寧ろ頑冥不靈たるを優れりとす。英人は利害の打算に長じ、利に就くこと流るゝが如きも、妄りに變説改論せず、相當の理由ありて之を敢てするや、批難の聲、四方に起る。グラッドストーンなり、チエムバレンなり、變説の理由を具ふるに拘らず、少からざる攻撃を被れり。人々自由を重んじ、随意に變説改論すべしとするは理の聽くべきに似たれど、國民の多數が此の状態にては國家は頗る危し。——（『日本及日本人』）

○裏切りと私利

裏切りと私利

幾多御家騒動に共通なるは裏切りなり。最初甲に従ひし者、乙に於て利を以て誘ひ、竊かに己れの味方せしめ、爲めに事態の紛糾を極む。裏切りなければ、如何なる騒動も頗る單純なり。是非曲直は深く、惑ふべき無く、常識を失はざる限り、之を誤るは稀れなり。唯だ利を昭はされて反覆常なきに至りては、事の何邊に落著するやを知り得ざるに及ぶ。封建時代に於て、小は一家を滅ほし、大は一藩を滅ほせる者、裏切りの與かれる所多し。而して裏切りは私利を求めて爲すべきを爲さず、爲すべからざるを爲すに出づ。——（『日本及日本人』）

○飼殺しの教育家と其子弟

飼殺しの教育家と其子弟

活動力ある者は活世界に出で、活動力なき者が教育界に残り、教